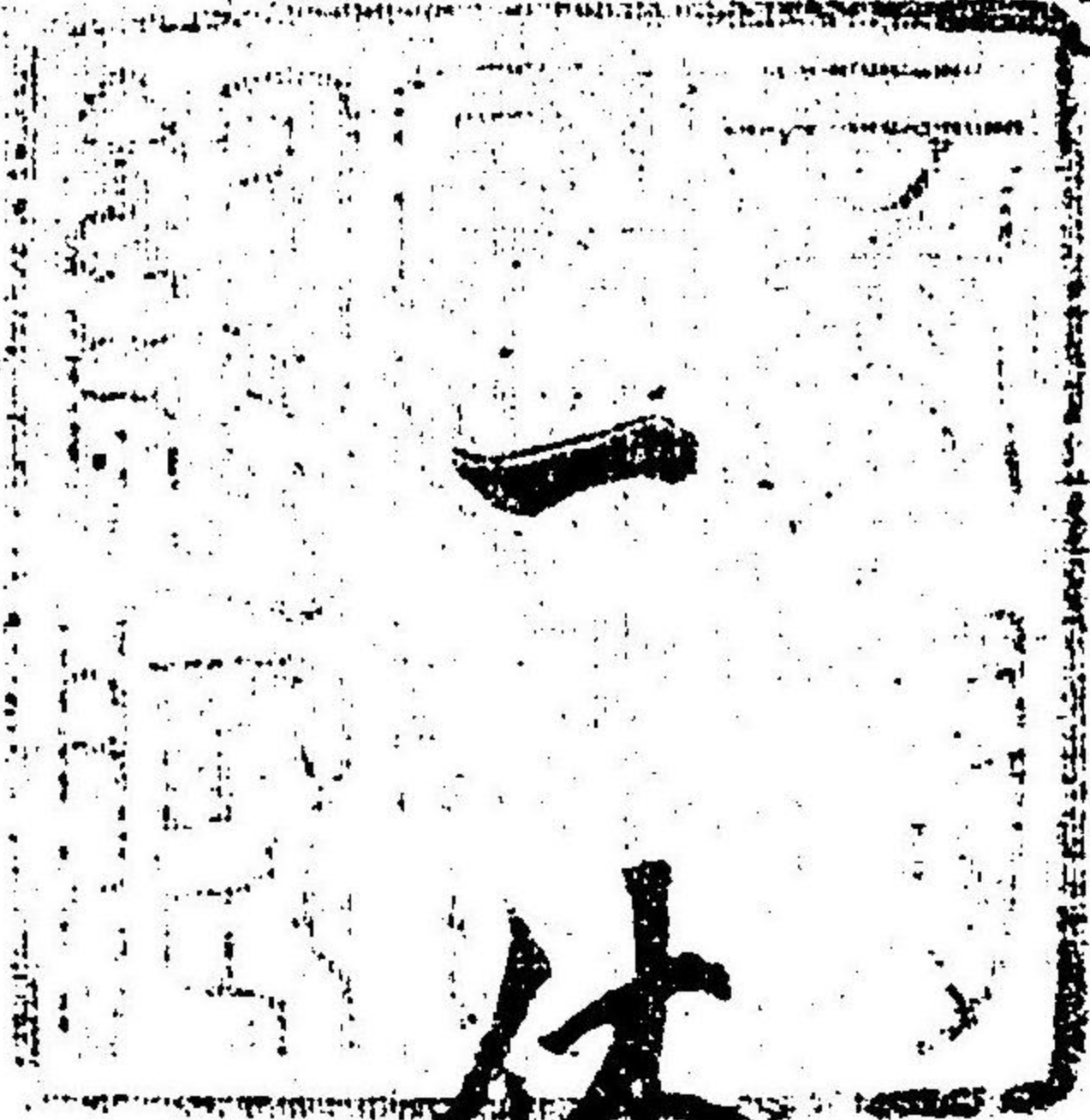


特64
307



休

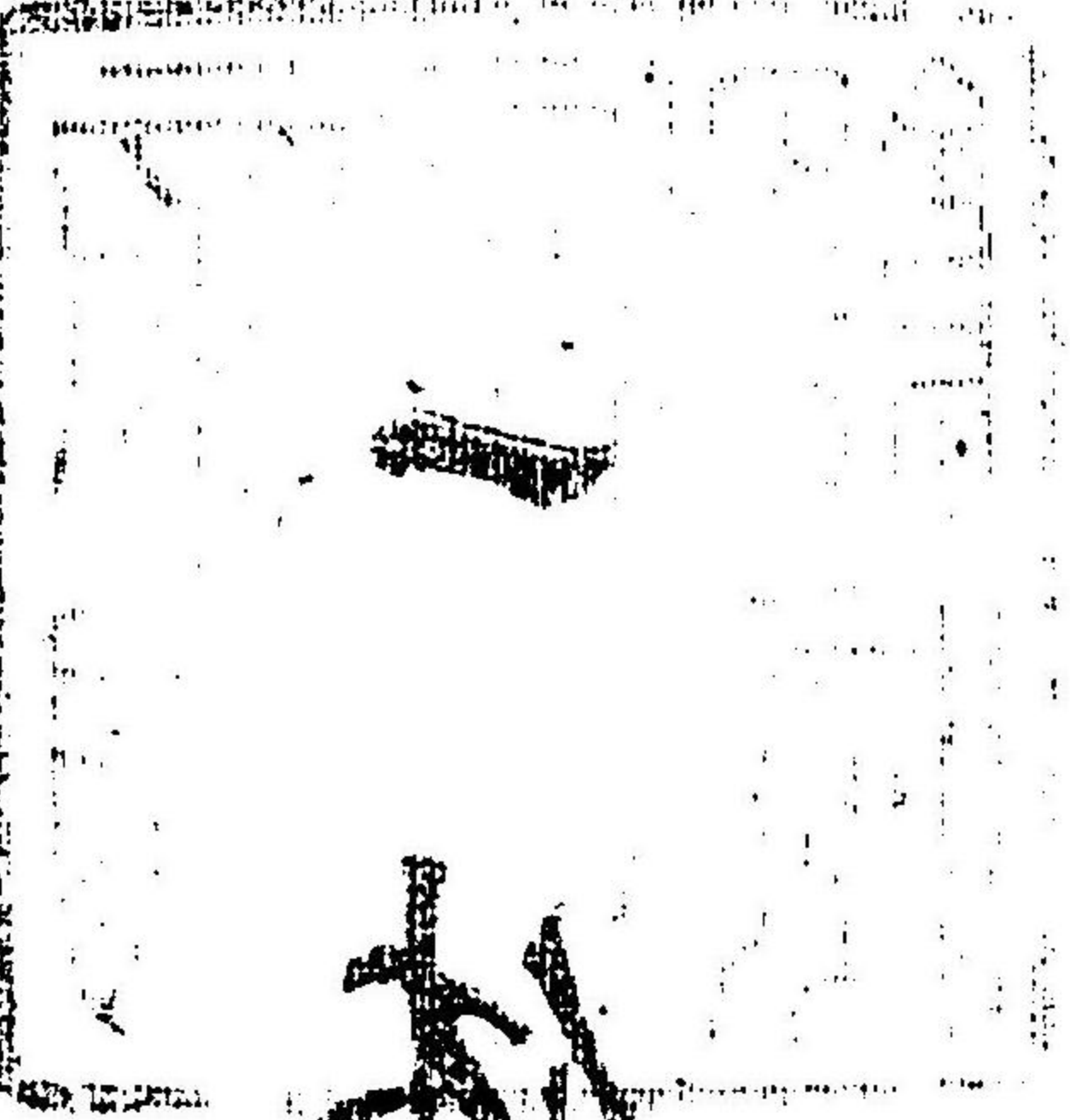
和

尚





第 307 号



一休古拙





一休和尚目次

- 禪師の御身分及び御行爲……………一
- 皮の類、橋渡り、鎌倉街道の御教化……………二
- 餅の缺片答の頓智……………六
- 地獄極樂の御教化……………六
- 名の質問の答……………八
- 引導の説明……………十二
- 大根洗の問答……………十三
- 皮越の答話……………十三
- 裸体の女に三拜す……………十六

○教院の罪の質問……………	十八
○木具者の御教化……………	十九
○虎の威を借る狐の御教化……………	二十三
○養命補身丸の恵與……………	二十四
二	
○鮮魚の引導……………	二十七
○蛸喰の御教化……………	三十一
○食べたる魚蘇生の御教化……………	三十四
○高き物の御教化……………	三十六
○堪忍の御教化……………	三十八
○戀煩ひの真相……………	四十

三	
○春屁……………	四十三
○飴ねぶり……………	四十四
○和尚の軽口……………	四十六
○知れぬ晝の贅……………	四十八
○生死問答……………	五十
○和尚の川流れ……………	五十一
○泣聲の聞きわけ……………	五十三
○祖師の贅……………	五十八
○元日の觸體……………	六十二
○善悪の質問……………	六十三

四

- 魂の質問……………六十五
- 神經病全快の御教化……………六十七
- 大文字の長くて読み易き字……………七十
- 錢ほごこしの制札……………七十四
- 死後の質問……………七十五
- 四十雀の引導……………七十七
- 波風立たぬ和尚の計らひ……………七十九
- 秘薬の高札……………八十二
- 踏みにちり繪像……………八十三
- 正白佛の御教化……………八十七

五

- 諂ひを誡むる御教化……………八十八
- 人の人たる御教化……………九十一
- 踊りの難……………九十一
- 法衣に料供の御教化……………九十四
- 不思議を誡むる御教化……………九十七
- 話則の傳授……………九十九
- 和尚の春情……………百一
- 性靈棚の御教化……………百五
- 五戒の御教化……………百八
- 宙にぶらりの御教化……………百十二

六

○ 備促の小糠	百十三
○ 狂歌の訴状	百十五
○ 疝氣入浴	百十八
○ 俵入の水葬	百二十
○ 一休蟻川初問答	百二十三
○ 武士への引導殉死止の歌	百二十六
○ 猿の恩禮	百三十
○ 別法山心外寺の問答	百三十二
○ 殺生者の改心	百三十三
○ 馬乗の歌	百三十四

七

○ 和尚の迷惑	百三十五
○ 不沙汰見舞の返歌	百三十九
○ 高野登山	百四十
○ 松の曲直	百四十五
○ 熊野山の詩歌	百四十六
○ 河豚往生の引導	百五十三
○ 蟪川の風雨見舞	百五十五
○ 西國諸候へ引導	百五十八
○ 行くらく	百六十
○ 新村酬恩庵の再興	百六十三

八

- 傾城地獄と問答……………百六十八
- 地獄の問答……………百六十九
- 文字の意味答への御頓才……………百七十
- 出會問答……………百七十四
- 輕口問答……………百七十五
- 秀句問答……………百七十七
- 赤飯の答話……………百七十八
- 極樂の沙汰……………百七十九
- 弟子の申し入れ……………百八十二
- 天の笠……………百八十三

- 幼稚の引導……………百八十五
- 乞食に小袖を興ふ……………百八十六
- 傾城に引導……………百八十八
- 煎茶賣の引導……………百八十九
- 大食の話……………百九十
- 國司へ下帯を遣す……………百九十二
- 子は寶……………百九十五
- 瓢箪の曲遊び……………百九十九

一休和尚

竹庵道人著

○禪師の御身分及び御行爲

一休和尚は後小松天皇の第二の皇子にましませり、世の人の耳に残れる御歌にも後の小松の二葉と詠じたまふも有りけるとかや、誠にいと賢くまし〜
尊き高位を蹈み散らし、大内を躍り出で、十宗を唯だ二目に睨みつけ、達磨宗とあり給ひて、九年面壁を盗人の跡の棒ちぎり木と見立て、御身は麻殻ほごとも思し召さず、浮世を瓢箪よりも軽く持てあし、邪あることを嫌はせ給ひ、御心は誠や竹を二つに割りたる如く、路人の口碑にあれば、舌の先の障とし侍るを仰せられしは、いよく有がたかりける。御幼年の頃より才智萬

人にすぐれさせたまひて、諸國御雲水の間より、諸人を導きたまひます。御一代、濟度の御意のみに渡らせたまへり。御諱を宗純と申し、別號を一休とぞ名づけ給ひける。

○皮の類、橋渡り、鎌倉街道の御教化

一休和尚幼きときより常の人に異り給ひて利口發明ありけるとかや、師の坊をば養叟和尚と申しける。然るに此寺に媚びたる檀家ありて、常に來りて師の坊に參學あとし侍りては一休の發明あるを感じ、折々は戲言を言ひて問答あとしけり、或とき彼の檀家の人、皮袴を着て來りけるを、一休は門外にて瞥と見て、内へ走り入りがけに一筆書き付けて、

一此寺の内へかはのたぐひかたかく禁制あり若し皮の物入るときは

其身にかあらずばちあたるべし、

と認め、門の柱に貼つけ置きたり、彼の檀家の人これを見て、皮の類にばちあたるあらば、此寺の太鼓は何とし給ふぞと申しける。一休聞き給ひて、さればとよ、夜晝三度づばち當る間、其方へも太鼓の撥あて申さん、皮の袴を着られけるほどに戯けられける。其後彼の檀家の人、養叟和尚を齋に招ぶとて、一休も御供にと申し、彼の返報せばやと工みけるが、入口の門の前に橋ある家ありければ橋の詰めの渡り口に高札を、假名にて太く書きて建てける。

此はしをわたることかたぐきんせいあり

と書付ける。養叟和尚は、時分よしとて一休を具して、彼の人の方へ御出あるに、橋の札を御覽じて、此橋渡らでは内へ入るべき道あ

し、一休いかにとありければ、いや此はしわたることよ、假名にて書きたれば、まん中を御渡りあれとて、真中を通りて内に入り給へば、彼の者出で来て、禁制の札を見ながら、いかで橋を渡り給ふぞと咎めければ、いや我は兩側は渡らず、正中を渡りけるぞと仰せられければ、亭主は口を閉ぢけるが、何が不審申さんとて、又曰く凡そ沙門の形と言つば、忍辱二躰の衣を着、罪障さんげの袈裟を掛けてこそ僧とは申すべけれ、いかに小僧ありとて、俗衣の出でたちは心得がたく候と申せば、一休は効けれども、歌一首をよみて答へらる。

着て来たぞ本来空のくろ衣ぞであかよらで人こそしらね

とよみ給へば、亭主も和尚も手を打ち、口を開いて塞ぎかねられけりとあり、さて御齋を出しけるが、今一度不審せばやと思ひ、一休には故と魚類の膳を据えける。一休は珍らしくや思しけん、ひたもの喰ひ給ふとさに、亭主の曰へるは、人しれぬ衣着たる御僧の、したか魚を食ふことよと戯れければ、一休聞き給ひて、口は鎌倉街道あれば、貴きも行き、賤きも過ぐと曰へり、亭主はこらへかね、かゝる物も通り候哉と、刀をするりと抜きけるを、一休すこしも騒がず、敵か味方かと問ふ、亭主は敵ありと曰ふ、然らば通すことあらず、いや味方ありと曰へば、其まよ、けへんくといひて、曲者が通るとて、只今俄に關がすはりたるはと曰ひ給へば、亭主も和尚も、此の小僧の口には勝たれまじとて言葉あぐ、舌の根を震ひて止みぬ

○餅の缺片答の頓智

一休十一歳の時のことありしが、師の坊他行したまひける留主の處へ、餘所より餅一つ貰ひければ、一休すこし割りて、師匠の歸り給ふに取出して奉る。師も道化人にて、満月無片破闕は何地にか有ると曰へば、一休は其頃より智慧さかしくましますせば、直ちに返答に、雲隱有是とて、彼の缺片を出されける、此意は、満月は圓く満ちて缺けたる處あり、此餅も満月の如く、まんまるに有るべきに、闕けたるは如何にと問ひ給へば、雲に隠れて此處に有りと答へたるあり、師の坊は打笑ひて、さても小賢しき小僧かあとして、彼の餅を皆與へたまひけるとあり。

○地獄極樂の御教化

一休和尚若年にたはせしより才智衆に勝れ、能く人を導きたまふ。或人問ふて曰く、いかに小僧、それ地獄極樂と申す事ありげに候しかしあがら、死後からでは證據なきよし承はる。さもありぬべし、若し人ありて悪事を爲せば、死して三途の大河、死出の山をいふ難所を越して、やうく地獄に入ると申すあり、さて又極樂淨土と申すは、是より十萬億土と申せば、遙の道を経て參るとあれば我等がやうある不達者ものは、極樂の事はさて置き、地獄へも行がたかるべし、此儀如何、一休こたへて、夫れ地獄遠きにあらず、眼前の境界惡鬼外にあし、淨土と言つば、此處を去ること遠からずと曰へば、此者申すやう、いやく左様に目の前に地獄極樂ありと曰ふとも、顯れて見へねば合點ゆかず、小法師の分としては、委しく

示し給ふことあるまじと、あざ笑ふてぞ申しける。一休腹を立て、
 さては其方は我を若年ものと侮り給ふかどて、頓て一休は繩を持ち
 て後ろへ廻り、彼の者の首に引かけ、思ふさまに締め付け、汝これ
 は如何にと申さるゝとき、此者合點して、尤も是れ地獄あり、其ど
 き又繩を解き給ひて、汝斯くある時如何と曰へば、淨土ありと答へ
 其まゝ合點して、さてもく小法師は、何の辨へも有るまじきやう
 に思ひ侮りしに、幼稚なれども斯の如く智慧あること、感じ入ると
 を申しける。

○名の質問の答

一休御諱を宗純と申し、別號を一休と名づけ給ひける。或人來りて
 一休と名づけ給へる御意は、いかある御心得にて侍るやと尋ねけれ

ば、よくこそ尋ねめされける。さりながら一休に深き心もあらざれ
 ば、かたりて聞かすべきやうも無しとて、

有漏路より無漏路にかへる一休雨ふらばふれ風吹かばふけ

と詠み給ひければ、彼の者聞きて、さても面白さうなる御歌や、有
 漏無漏とは、いかなることにてたはしけるぞと尋ねければ、傍なる
 拂子を取つて彼の者の顔を撫で給へば、いや何事をか成さるゝと、
 愕きたるばかりにて、何とも心得すと申す、一休が曰く、其何とも
 心得ぬところが無漏路なり、ばつと愕きしところが有漏路なりと仰
 せられければ、彼の者肝を冷して、有難や即時に大事を授かりける
 と悦びて、さて御歌の一やすみとは心得申候、雨降らば降れ風吹
 かば吹けとは如何なる御意にて侍りけるぞ、さればよ、穢の道のこ

となれば、雨も風も厭ふこと侍らすと仰せられければ、扱も有がた
き御歌かな、恐れながら只今さづかり申せし意を、一首申して見ん
と申しければ、それは奇特なる志やと曰へば、彼の者は、

うろちむろち一休ぞと聞くときは十萬億土寸先と知る

と詠みければ、一休聞こし召し、善哉々々として、尻餅つきて悦びた
まひて、かゝる例しは漢土にもありしことぞ、四休居士といふ人あ
りけるに、山谷といふ人、その四休の意を問ひければ、四休笑ひて
答へて、

魚茶淡飯飽即休。 補破遮寒暖即休。

三平二滿過即休。 不食不妬老即休。

と申されければ、山谷が曰く、是れ安樂の法なり、それ能く少しき

ときは不伐の家あり、足ることを知るに極樂の國なりと感じ親しく
語りて四休の心を得、三首に作りうたい樂みしとかや、其一首に

富貴何時潤三閻體。 守錢奴與三抱官囚。

大醫診得三人間病。 安樂延年萬事休。

と有りしに能く似たり、一休の意を問いて、今其方の歌よむことよ
と感じたまへば、彼の人申すやむ、一休の二字を尋ねて、四休の四
字を知る事、求めずして得を幸ひと註したり、是れ幸ありと悦びけ
るに、彼の四休のうち、三年二滿とは如何なる事やらんと申しけれ
ば、其方の内方よと曰へば、合点まいらず、見にくきといふ意かと
いへば、いや然にあらず、たごせのことなりと曰へば、扱てめづ
らしきことかな、誠に三平は兩の頬と鼻、二滿は額と頬よ、さても

面白きことあり、さりながら、女どもに聞かせあば、一休さまをつめり申すべしと笑ひて歸りける。

○引導の説明

一休十七歳の御とき引導したまふ。或時下賀茂邊を通りたまふ折ふし、途中に死人あり、一休立ち寄り引導を授け給ふ、時に或人見て恐かなり小僧、死人に向つて何事を言ひたりとも耳に入るべきや、如何と言ふ、一休答へて曰く、芭蕉無耳雷之音聞則自出、此文の意は、夫れ芭蕉といふものは、耳も無く目も無けれども、芽を出さんと思ふときは、雷の音を聞きて則ち芽を出すとなり、斯の如くの非情草木の類までも、因縁加合の理あり、況んや人間に於てをや、彼此以て同事なりと返答したまへば、此者げにもと思ひけん、一言の

答へにも及ばず立去りたり。

○太根洗の問答

一休十二歳の時、門前なる小池にて中ぬき大根を洗ひ居たまふ處へ雲水の僧、大徳寺に止宿を求めんがため來かゝりて、戯れに、小僧大根を洗ふかと曰ひしに、一休はやにはに、持ちたる中ぬきを振り上げて、何に、出家を捕へて小僧と云び、小根を見て大根とは如何にと曰いさま打てかゝり給へば、破の雲水の僧は一句の答へも爲さず舌を巻き、足の踏み所を忘れて、鷹が峰さして逃げ行きしとかや

○皮越の答話

上京に糸屋由右衛門といふ者あり、内々一休和尚の答話よきこと古今無双のよし承はり、いつぞや紫野へまわり、何にても珍らしき事

を承はらん、さなくば此方へ齋に申し入るべきと、かねく思ふ折
 ふし、和尚檀家の方より歸りたまふに、途中にて行き逢ひ、さてく
 一段の處にて御目にかゝり候ものかな、序ながら明日少し志す日に
 差當り候、御坊さまへ御齋を進じ度候、かねく御寺へ伺公いたし
 申さんと存候處、幸ひ此れにて御目にかゝり候、必々と申せば和尚
 は、心得申候、さりながら宿所は如何と曰ひ給ふとき、此人、宿は
 堂町通、そんじよ其處なりと曰ひて別れぬ。一休心得、さて翌日早
 天よりこしらへ、彼の者の宿を尋ね行き給ふに、此者もすこし心あ
 るものにて、店に小さき鉈を吊りて置けり。小さき鉈を吊りたるは
 こなたと言はんことありと判じ、頓て内に入り給へり、然るを又坐
 敷の口に、犬の皮を敷きたり、和尚坐敷へ通らるゝときに、亭主出

で會い、さてく今日は折ふし路次あしく、御太儀の御事なり、御
 足よこれ候はん、洗足まゐらせんと申す、一休いや、只今かはを
 越えて参り候故、すこしも苦しからずと仰せらるゝに、亭主さてこ
 そ早一ぱい喰はされたりと思ひ、さて御膳をこしらへ出す、和尚蓋
 を取りて見たまへば、何れにも小糠を一杯入れたり、一休さあらぬ
 体にて居たまふ處へ、亭主坐敷へ出づれば、一休さてく今日の御
 志は、みなぬかにて候かと仰せらるゝに、亭主いよく感心し、や
 がて和尚坐を起ち給はんとするとき、亭主は尙も心を引かんとて、
 錢百文を取り出し、これは今日の布施にまゐらすなり、此れへ寄ら
 ずして、居ながら御受けあれと申すに、一休聞さあへず、心得申候
 此の儘にて受け申すべし、然候はゞ投げずに此處へ賜はり候へと申

さるれば、亭主いよく感じ、さてく御坊様は、聞及びたるよりは答話僧にてまします、凡人は暫く思案して申し出すに、未だ舌も引入れざるうちに、早くも斯く仰せらるゝ、古今稀ある御坊様やと感じける。

○裸体の女三拜す

一休和尚或る河邊を通り給ふに、女の裸になりて居けるを見給ひ、陰門を目さして三度禮拜して過ぎ給ふ、折ふし在り合ふ人々これを見て、さても彼の僧は狂氣か、出家の身として、女の裸になりたるを見て、三度伏拜みて行かるゝは如何なる事やらん、如何さまにも狂氣あるか、然もなくば斯ることはしたまふまじ、めづらしき事なり、いと近づきて子細を尋ねん、實に道理なりとて、我もくと後

を慕ひ、やがて追つき袖を引き、御坊よ、只今女の肌を見て、禮拜したまふは如何なる因縁やらん聞かまほしく候、但し佛道修行に斯かる事やましますか、いかにくと責かけて問ひければ、一休有無の事にも及び給はず、

女をば法の御くらといふを實に釋迦も達磨もひよいくと生

む

と曰ひすてよこそ通りたまふ。如何なる坊主やらんとふしぎなすに知る人ありて、彼れこそ一休なりといひし人あり、さてこそ彼の僧ならでは斯様の事言ふべき人ありとも思へず、殊勝やな、世の中の普通の坊主あらば、女の肌を見たらんには、心地よげに、ねぢかへりく目も放たて行くやらん、斯く禮拜あして通りたまふこそ有が

たけれ、實に女の胎内より、貴人高位も出で給ひ、諸宗の高僧たちも出らるゝぞかしとて、人皆道理と感じける。

○教唆の罪の質問

一休和尚、人を殺す者に證據を引き、得道させ給ふことあり、爰に早川治郎太夫と申す者和尚の許へ行きて申さるゝは、夫れ人を殺すに其理もつともならば、千万人を殺すとも苦しかるまじ、又殺すまじきことにて殺す理なく、ば一人ありとて殺すは惡逆無道あるべしと申しけるとき、和洞仰せられけるに、夫れ殺生はもろもろの罪の根本なり、生あるものは、たとい蚤虱にても殺すことあるべからず何分に殺もさぐるには如かじ、男答へ申すやう、或は主命と申し、又は朋輩ごもに頼まれぬれば是非なく殺すことあり、斯くあるとま

は、其頼みたるものこそ咎ならん、我は全く咎は被まじと、利口自慢して申す。和尚は舌も引入させずして、汝、彼の柳に雪積もりたり、杖重げに見え候、拂ひて給びてんやと、仰せられける。心得申候とて柳陰に立ら寄り、振り落しければ、頭あるは袖の上に、雪散りかゝりしを打拂ふとき、和尚の曰く、汝いかあれば雪を拂ひしぞ某が頼み申せば、雪は某にこそ散りかゝるべき事なるにと仰せらるれば、此の人碓と行き詰まり、それよりして、重ねて殺生することを止めけるとかや。

○不具者の教化

爰に木屋平次郎と申すもの、極めて長小さく色黒き男なり、世間の人々これを嘲り笑ふこと尋常ならず、まして他所へ用事を調へに行

くことあらば指をさし、マ供あまた附慕ふて道をも安からしめねば
 れのづから歩みを爲すことならず、或る時少し心ざす事ありて、一
 休和尚を請じ、我身の不具を備さに話し、今更これを悔い悲しむ一
 休仰せらるゝは、生れつきたる身を、小さきとて何とすべき、左様
 の事を悲むものにあらず、其子細は、金は小さきものなれども天下
 の寶となる、針は小さけれども衣服を縫ふ寶となる、墨は黒けれど
 も、佛經、祖祿、聖經、賢傳の書を記して天道の助とある、漆は黒
 けれども諸道具を塗りて助く、山は高しといへども貴からず、樹の
 るを以て貴しとす、霜雪は白けれども人皆これに傷めり、たとい肥
 太りたる人が、いかほど瘦細りたく願いたりとも叶ふまじ、然るを
 強て瘦細らんとて、食物を止め、身体を縮めたらばとて、必ず氣血

をへらし、病を生じ、身命危うかるべし、又瘦ほそりたる人、何ほ
 ど肥太りたしと願ふとも叶ふまじ、肥太らんとて飲食物を澤山に用
 る、寝伸居伸をすれば、必ず食傷して便通しけく、牛の糞のかさね
 くなるを寢所にも包み置き、後には俊寛僧都の鬼界が島に住みし
 ありさまになりなば、命も既に危うかるべしされば薬師如來の出世
 驢婆扁擔が再來して、薬を與へ療治するとも、いかで其驗を得んや
 然らば色の黒白、長の長短と亦斯くの如し、爰にたもしろき話あり
 或る處に才覺利發の人あり、此の男いかにも背が、ちんちくりんに
 て、我身ながも恨めしく、悔い悲しむこと切なり、餘り無念さに、
 つくくと思案しけるに、我身こそ斯くありとも、是非子供に於て
 は、背の高き子を持ちたし、さあらば先ず女房を迎へんに好みあり

みめかたちは少しも望なし、只脊の高き女を尋ぬるに、其背六尺餘にて無双の悪女あり、いそぎ之を迎へ取り、夜晝かせぎける程に程なく此の女懐妊して、九月をも過ぎて、臨月となりて生みをとし悦んで取り上げて見れば娘なり、あつばれ男子にてあれかしと願ふところに、女なり、捨つべきにもあらず育てけり、斯くて此の度は是非に男をまうけんくとかせぐ程に、生む程にく、ついでさまに女子ばかり五人まで生めり、彼の男は、あら腹立やち無念やと怒りためきけれども其甲斐もなく、つぶさうの捨うのと、さやけさもさすが左様もあらず、養育するほどに成人するに従ひ、何れも母親に似て、色黒く背高く、鼻すぢびしげ頬にへ、俯向に轉ぶには一つの徳には鼻の用心いらす、眼ほそく、くひさき、無あごの如くにて、

六尺ゆたかの女なり、婿取嫁入ならざれば、何とも持てあつかいたる有さまあり。何事も斯様の事を聞くからに、諸事悔い悲むことあらじと、言葉に花を咲かして、語りてこそは歸られけるとぞ。

○虎の威を借る狐の御教化

或る人一休の草庵へ尋ね行き、和尚に會いて申すやう、我等文盲不束者に候へば耳がたきことは聞きても聞かざるが如し、何にても面白きこと候は、御話し給はれと申すときに、和尚されば漢土に虎が狐を追ひ詰め、すでに喰はんとするに、此の狐の申すやうは、いかに虎どん能く聞き給へ、必ず我を喰ふことなかれ、今日よりして某を、もろくの獣の大將に、天道より仰せ付けられたりさる程に汝我を害するらば、天命に背き忽ち汝が命滅すべし、若し此の事

詐りと思ふならば我あとに従きて供をして參るべし、もろくの獸は我れを見て必ず恐れたのよき逃隠るべしといふ。虎は不審に思ひさらばとて、此の狐の後に立ちて行く、諸の獸ども案の如く皆ちりくくに逃げ隠れ、怖れたのよきひれ伏す、其子細は此の狐を怖れて逃ぐるに非ず、後なる虎を見て、もろくの獸は逃げ隠れ、怖れ戦くあれ、されども虎は眞に彼の狐に恐れを爲すと思ひ、天命を重んじ、却つて守護をあしけるとかや、是れ抑も大きな化やうかな。されば世間の家々にも、彼の狐こそ多ければ、化され給ふな、御用心くとぞ申されける。

○養命補身丸の惠興

能勢小作と云へる救活者あり、時しも十二月廿七八日の事なりしが

借銭取に請ひ詰められ、爲ん方なく諸方を駆まはり才覺しけるに、我も人も各自に用多き折からなれば、我に用立てんと言ふ者なし、然るに粟田口邊に、彦八と云ひて富榮ゆる町人あり、彼れが家へ尋ね行き、金を借らばやと思ひ、粟田口へと急ぎける。此の彦八と云ふ者、如何なる前業の拙きや、朝夕の飲食として、黒米飯に水汁にて喰ふほどの吝嗇者なり、彼れに斯くと曰いけるが、此の如く、吝嗇しき者なれば、我身にさへ吝み、朝夕の食をだにも時に取りては一度は食はで過すほどの者あるゆる、縦し親類たりとも用立つことは思ひも寄らず、されば他人の小作には、かつて取合はざりしかば、小作は是非あく歸るとて、

財ともならぬ財は彦八が、持たるかねは我身さん玉

と詠みすて、歸りたり、さる人の申しけるは、一休和尚へ参り、な
 げき給はゞ、定めて和尚は慈悲深くまします故に、少しは賜はらん
 ことはあらず、午々参られよ、殊に其方の富みたるときは、度々相
 應の用事を叶へられし事なれば、其方の事は和尚かげにて懸るに仰
 せられ候まゝ、御うけあい給はぬ事あるまじ、とくくんと申せば、
 此の者實にも同意して、やがて和尚方へ参り和尚出會ひ給ひ先づ四
 方八面の話二つ三つして、序よきときを見合せ、さて申しけるは、
 いかに和尚様、人間は四百四病の其中に、貧苦ほど辛き病は無しと
 古人も是れを悲み候、されば和尚も内々某が持病は御存じなり殊に
 此の頃頻りに差起り候、さる醫者に尋ね候へば、此の煩ひは、我等
 が療治には叶ひがたし、斯様の病は遂に醫書にも見え申さずされど

曾て病の名を申さねば、醫著の見立を知らざるに似たり、多分此の
 煩ひは借金と、いふ煩ひならん、如何ある者婆扁鵲が療りたりとも
 治しがたかるべし、妙薬の金銀丸を貰ひて服まば即時に治すべしと
 教へられたり、若し和尚様に御持あらば、一包御報謝に預りたしと
 涙をはらくと流して申せば、和尚聞き給ひて、さればこそ其病は
 年に二度づゝ發る病なり、先づ當月今頃、秋は七月中旬、何れも遠
 國までも流行り、わづらひ申すなり、さもあらば恐僧すこし持合せ
 あり、一包まいらせんとて、奥へ入り給ひ、鍛一包取出だし、表記
 には、養命補身丸と書きつけ、若し再發のときは知らぬあり、早々
 歸られよと述べられたり。

○鮮魚の引導

和尚いまだ小僧にてたはせしとき、師の御坊に事へて物よみ手習ひ
 などして居給ふとき、夜寒の頃なれば、師の坊は干鮭を羹としてた
 一人食りて、一休へは豆腐やうの物ばかり食らせられけるに一休
 これを見て、凡そ出家は、鮮き魚を食はざるよし承りしが、師匠は
 干鮭を食るは苦しからず候か、然あらば我等も食へ申さんと申され
 ける。師の顔たかしく思召され、汝、斯様なる小僧の身として、生
 ぐさき物食ふときは、忽ち罰あたるなりと仰せられければ、一休眉
 をひそめ、少時思案して申さるゝは、同じ人間の身として、小僧に
 のみ罰あたらんや、老僧こそ生ぐさき物食らば罰は當るべけれどあ
 さ笑ひてたはしければ、師の坊曰はるゝは、幼き身として心たけた
 る言ひやうかあ、さればよ老僧とて御ゆるしは、無けれども我等は

引導をして食ふばごとと曰ひ給へば、其引導を如何なる事やらんや
 少し承りたしと申されければ、さてく汝はこしやくある人や、い
 で引導して聞かさんとて、一ぱい盛りたる干鮭をさゝけて、箸たつ
 とりのべて曰はく、

汝元來枯木の如く、助けんとすれども、生きて二たび水中に遊
 ぶこと能はず、愚僧に腹さらはれて佛果を得よ喝。

と曰ひ給ひて、ひたもの食りける。一休は、つくぐと聞て又眉を
 ひそめ思案して、夜の明くるを待かねて、急ぎ魚の棚へ走りゆき、
 さも大きく見事なる鯉を一献買取り來りて、味噌汁をこしらへ、彼
 の鯉をひん握り、菜刀たつ取りのべて細首宙に打ち落さんとせられ
 ける處へ、師の坊立出で御覽じて、これは沙汰の限りなり、昨夜も

示し教へし如くに、いとけなき小僧の身として、干鮭だにも無用といひしに、其生きて活動く物を害して食はん事、以ての外のことなりと誠めたまふ。一休は騒がず、我等も引導たはし候とて、然あらぬ体にてたはしけるが、師の坊は呆れはて、大に笑ひて、それは如何なる引導ぞや、若しも然らば許すべし、然らずば逃すまじとて、彼の寺内の一棒な小脇に搔い込み、引導いかにと責められける。一休少しも騒がず、いで引導いたさんとて、左に鯉の細首をひん握り、右には菜刀を、しやに構へて曰く、

汝元來生木の如し、助けんとすれば逃げんとす、生きて水中に遊ばんよりは、如かじ愚僧が糞とあれ喝と。

とて、鯉の細首を、水も溜らす打ち落し、ぐつくと齧てしたゝか

食ひて、空うそ吹いてたはせしかば、師の坊これを見て、さてもよき引導ぶりにて、變りたる心得かな、昨夜我等が引導にては、干鮭は佛果を得ずして糞となるべし、汝が鯉は糞とはあらで佛果を得たり、さてく活機なる人々、禪僧あるぞや小僧どのとて、彼の一棒をからりと捨て、舌を振いて曰いけるは、三年になる鼠、を今年生れの猫が取るとは、かゝる事をや導すあらん、兎角に汝は常人にはあらじと感じ給ひけるが、案の如く、程なく、天下老和尚と自ら曰ふほどの活祖師にて、一休とて名を千歳に傳へ給ひて、田を鋤返す爺、糊を摺る姥までも物語りの種と人に言ひても難され給ふこと、誠に凡人にては、ましまさざりける。

○蛸喰の御教化

一休和尚は蝟が御好物にて、或日つくづくに蝟を買ひに遣はされけるに、折ふし店にされて無かりけり、彼の使の者、此處彼處と尋ね居たる故、遅かりしかば待わび給ふまゝ、

此たびは急ぐと言ふに長袖の蝟の人道みちの遅さよ

と詠まれし處へ、蝟四五はい買もて來りければ一休悦びて、此蝟むざ／＼と食ふも無殘の事なり、引導の碩無くてはとて、

千手觀音蝟手多。斬注ニ袖酢一拜如何。佐州一味天然別。

他禁戒任ニ老釋迦

と吟じて、やれ引導は濟みけるぞ、火葬にやべきか土葬にせんか、いや／＼水葬にせよとて、手ごり足ごりして、手に／＼沐浴させて袖酢を注げて、ひた喰に食ひ給ひ、さる檀家へ行きて、酒など飲み

けるが、餘りに多く蝟を食へける故吐却なされけるが、皆蝟なり。檀徒の人々これを見て大に騒ぎければ、一休和尚は佛のやうに思ひしに、蝟を食りけるかな、さて／＼生ぐさ坊や、これは／＼と嘲り笑ひけり。一休少しも騒がず、いやとよ、我は蝟を食へねども、口より出れば詮方なし、さりながら、我れ蝟を食ひにはあしらすと争ひ給へば、口より吐き出したるもの食はぬと争ひ給ふかや、いよいよ聞えぬ御坊やと、躍り上りて笑ひければ、否々汝たち、縦ひ口より蝟出でたりとて、食はぬ證據を見せんとて、皆々引連れて百万遍に行き、善導法然の畫像を見せて、彼れ見給へ人々よ、善導は阿彌陀を食ひしことは無けれども、口より三尊を出し給へり、善導大師さへ、食はざる物の口より出づることを制し難し、況して恐僧は

喰はざる蝟の出づること、更に詮方をしと仰せられければ、皆人横手を打て、さても頓作なる御返答やと、口を閉ぢて歸りける。

○食べたる魚無生の御教化

一休和尚の許へ或人來りて、和尚は生佛にて、魚を食して水中へ吐出し給へば、其魚忽ち元の如く生かへると、洛中に此事を専ら申傳ふと語りければ、一休たかしく思ひて、洛中の辻々に高札を上げられたり、其詞に

來る何日下り松の邊り紫野に於て魚を食ひて其まゝ元の魚に吐出し水中に躍らさしむる事なり。御望のかたぐ御見物に御出待ちたてまつる、太夫は天下老和尚一休大禪師

とぞ言かれける。洛中の諸人これを見て、うそか誠か、斯ばかり人

々言ひけれど、實しからず思ひしに、さては疑ふところ無し、正しく御自筆にて高札を建てらるゝ上は、驗なくては叶ふまじいさや人々見物して、末代の語り句にせよやとて、知るも知らぬも、見しも見ざるも、其日の來るを待かねて、門前に市を成し、我れ見漏らさじと轉ぶまで、伸び上り、洛中の貴賤群集せり、其時にもなりしかば、大盥に水を入れ、魚を能く料理して、彼の盥の邊り御膳を据ゑける。一休出で給ひて、彼の魚をひた喰ひに喰ひ給ひ、さて半切に向ひて、喝々と曰ひ給ひて、暫く目を塞ぎあごしたまへば、見物の群集は御顔を見つめ居て、生きたる魚を吐き出し給ふは、今かさまかと待居たるに、暫くありて曰ひけるに、各々遙々の御出なるほどに常よりも一際手際に吐き出し見せ申さんとて、種々思案する

に、なか／＼吐かれさうにも無く、是非に及ばず糞にありとひりて捨て申さん、はや各々も御歸りあれとて内へ入り給ふ、見物の萬人は膽を潰し、扱もたごけたる御サと、興を冷まして歸りけるが其中に心ある者曰ひけるは、只今食りたる魚は、皆生きて淵に躍るあり有がたま一言かな、誠に正法に奇特なしとこそ承はりしに、人の餘りに譽めんとて、不思議なる事を言ひて譽めんが爲めに、却て誘るなれば、其理を示し給へるなり、あら有がたしくと感じければ皆人は是れに氣が附きて、合点したるも合点せぬも、うまづさ合へりて歸りけり。

○高ひ物の御教化

或人和尙の許へ参り、和尙對面あり、賭事の話終りて後、此男申す

やう、和尙様私は此頃病中の處、本服いたし、今日初めて宅を出て先づ和尙様へ罷り出でたり、さて和尙様には御答話がよさと申す事凡そ日本中に流布して候、あはれ何にても御話聞かされたく、さりながら今の時世間に高直あるものは何々にて候や、一休聞しめしされば、高きものを言はんとあらば、

富士の山に淺間の嶽、伯耆の大山高山の峰、愛宕山、比叡山、東寺の塔天狗の鼻、品こそ異れ、さだふの墨跡、大灯や、さて貫之の歌畫、定家の色紙短冊、扱、あらがねの土の物には、先づ、ほふんりんの形付、丸壺如子の背や、はな 蕪川あし、鶴の一聲、勢至堂、扱脇差や太刀かた、な吉光、正宗、國俊、波の平行安、白井の鞆に日での年の米の價と、員數は尙も高き

金なり、伽陵頻加の聲立て、童の歌い聲、

萬事断らん是迄なりと言ひ納め給ふところへ、檀家方よりとて御衣を一衣、これは和尚様へ進上し参らすとて持來る、一休さのみ嬉しく思召さるゝ氣色も無く、一言の禮と云ふべき詞も無く、たゞ狂歌を

から衣またから衣唐衣かへすくもから衣かな
とよみて、これを返事にして送り給へり。

○堪忍の御教化

さる初心の男あり、さいく一休和尚へ参り、萬うけたまはる和尚此者を見るたびに、其方は知氣なる人なり、物ごとに随分堪忍せられよと仰せらる。此者答へて申すやう、尤も堪忍仕ること、骨身に

こたへて覺え候、さりながら我れ何の構ひも無く、無異無事に罷在り候とき、いたづら者來りて、某が面、にかす吐を吐け候を、面拭ひて堪忍仕候と申す、和尚聞たまひて、言語道断、それは悪き堪忍の心得やうかな、かへすくも、其滓吐を拭ふべからず、若し拭ひ候は、吐かけたる田夫者は、我等が滓吐を、汚し穢しと思へばこそ拭いたれ、憎き仕方なりと猶々怒り、重ねては何なる目にか合はせんすらん、然る程に其滓吐を、穢くとも其まゝ置きて干つてくれべし、夫れ何の咎も無き人の面へ、滓吐を吐かける馬鹿者は、生ある者にあらず、偏へに狂亂醉狂、非人とも謂ふべし、蠅といふ虫に、いかなる貴人高位の人の頭へも恐れず上り、雌雄のかたらひ事をも爲し、或は糞をひりかくる、されば其蠅は、固より虫なりと思

へば腹も立たず、眞つ其如く、蠅同様のものに對するときは、人倫の爲す作法にあらず、堪忍の心得是ほごにも無くては如何あらんと曰へり

○戀わづらいの真相

一休和きゅうわ一いち大事因縁の御工夫なされしとき、諸檀徒あるひは御友達衆、毎日訪らひ來まして、妨げとなりければ喧しく思召して、御心地あしゝとて、一るん人に出で會い給はず、皆人心元なく、折々に御見まひ申しければ、御長髪はうゝと給ひて、何とも色見えす御惱みとのみ仰せられける。檀徒を先として、御知音衆寄り合ひ是れは氣遣はしき事なりと、時の名醫を入れかへゝ掛けまゐらせ、御病は氣一荷にと置けば、醫師申されけるは、御脈は如何にもよし

不審なる御煩ひと、ごれゝと申しける、或時檀徒知音衆寄り集まり、此御惱みの様子は、如何さまにも、濕熱の病と見えす、若き御僧の事なれば、若しや戀を成されて、斯く思ひわづらひ給ふ事やあらんと、口々に申されけるが、否々人多く知りたりと思召さば明かし給はぬ事も有らん、密に好き中の知音のみ二三人見まいて密と伺ひ侍らば、誰と名ざしあるべし、然らば誰人にもあれ、此者どもが係りあば、なごか御本意を遂げられぬことあるべきとて、頼もしく言ひ合せ、密に三人参りたり、一休出會ひ、方八四面の物語すみて、一人申しけるは、此中さまざまの御療治にても、御脈は常に異らずと醫者各々申すなり、平生とは異ひて、何とて心深くわたらせ給ふぞや、定めて戀を成さるゝと見つけ侍るは御目か、有の

まゝに仰せられよ、叶へて参らせんと、うちつけて申しける。一休
 いがにも嬉しげなる御面ばせにて、此上は何を隠すべき、此日ご
 ろ戀わびて、さて斯の口く塞れはて候あり、よくこそ仰せ出され
 たり、何とやらん我等には、似合はぬ事にて侍れども、各々は目頃
 のよしみなれば、偏へに沙汰なく叶へて給へ、さりながら、糸なら
 なく心亂れて愧かしや、それと名をば、面前にては述べ難し一筆
 かきて参らすべし、門外へ出で給ひて、開き御覽じて、急ぎ叶へ給
 はらば、我等が命は生存へて、各々方へは其かはり、喜き道教へ申
 さんとして、奥の間へすんど入り、一筆さらりと書きて引ひすび、彼
 の三人に渡し給ふ。三人よろこび、御心やすく思召せとて、門外へ
 走り出で、扱こそ申さぬ事かはとて、急ぎ其名を知らまをしくて彼

の文ひらきて見れば、歌に、

本来の面目坊が立ち姿一目見しより戀とこそなれ

我のみか釋迦も達磨も阿羅漢も此君故に身を塞しけり

と書かれたり、三人の者ども案に相違して、横手を打て、日頃の御
 心も知らぬ身が、有らぬわざを思ひけるこそ可笑しけれ、今に始め
 の戲謔に、たばかられけるこそ愚なれ、誠に有がたき御坊かな、繪
 に寫し木に刻めるは多けれど、臆もちの釋迦如來なりと、拜まぬ人
 は無かりけり。

○春の屁

一休和尚檀徒二三人と共に、東山邊へ遊藝に出で給ふ、時しも春の

中央にて、樹の花は盛り最中にて、此處彼處に遊參多し、さる片はらに、五六人打ち寄り、手を打き躍り上りて大笑して遊ぶ、何事か面白かりけると聞く所に、屁をひりて面白がる、檀徒のうち一人の申すやう、餘り酒にてうじ、何がそれはご屁が面白かるべき、一休申さるゝは、いや、面白さこそ理りなれ、よく〜昔より面白さ事なればこそ謠にも、

面白の春へや、あら面白の春へや、

と謠ふほごに、さては、春の屁は面白さも道理を申されま。

○飴ねぶり

一休和尚いまだ十二三歳のころ、師匠飴壺を一つ持ちて、たゞ一人嘗め、小僧には聊かも嘗めさせずして、汝これを假にも喰ふべから

ず、若し是れを子供が喰へば忽ち死ぬる。毒なりと云ふてひたもの我ればかり喰ひては取置かるゝ、一休思はるゝは、あはれ毒にもせよ、死ぬるとも師の出られなば喰ふべしと思ひて待ちける處に、折ふし師匠用ありて出でらるゝ、一休やがて探し出し、棚より取たるしさまに、打こぼし、頭へも着る物にも付ける、日頃喰ひたしと思ひけるまゝに、先づ二三ばい喰ひて、剩へ師匠の秘藏せらるゝ壺をうち落とし、微塵に爲す、斯くする處へ師歸らるゝに一休しみぐと泣かるゝ、師は何事ぞと問はるゝ、されば大事の飴壺を打破りたるなり定めて御尋ねのときは何と申すべしと思ひ、命生きても由なし子供が喰へば死ぬると抑せられ候はどに、一盃食へ候へども死なず二三ばい食へつれども死なれず、頭にも着物にも着けて死あんと存

候へども、すべて死なれ候はずと述べければ、師の坊も言の葉なく
て、うち笑いてぞ入り給ふ。

○和尚の輕口

或時白河邊に住みける桑門に、名譽ある輕口の人有りけるが、一休
の輕口ある事を聞及びて、いつぞは行きて難句を言ひかけ試んど、
常々心がけられけるが、偶と思ひ當りたる趣向ありければ、さらば
参りて知る人にもなり、さて一句して見んと、はるく白河邊よ
り、紫野へとぞ急がれける。折ふし一休は庵にましくて知る人
なり、兎角するほどに、内々巧みし一句の句作も出来ければ、彼の
僧申されけるは、承り及びし御輕口を何にても一句遊ばせかし、何
とぞ付けて見候はんと申されければ、一休仰せらるゝは、客發句に

亭主脇とこそ申せ、先づ其方遊ばせとありしかば、内々巧み置まし
事なれば、さらば申して見んとて、難句をこそは出されけるが、此處
は何と申す處ぞ、一休紫野と仰せられければ。

紫野丹波近

とせられければ、未だ息を引き入れぬに、早や付けられけるは、其
方は何處の人ぞ、白河の者なりと答へければ、

白河黒谷隣

と遊ばしければ、彼の僧肝をつぶし、さしも難かしき章句あり、一
句のうち二つの色字、二つの所の名、如何なる瓢箪の川流れなる
輕口も、少しは濼うこぶうしと給ふべしと思ひしに、貝とる海士を

らで、息もつきあへず付け給ふ。斯かる名對ある上は、恥や畏しと空うそふいて、尻をからて逃げられしとあり。

○知れぬ畫の讚

畫かきの土佐守に内々掛物の畫を一幅たのみたる人ありしが、終に描きて遣はさず、頼みし人心せきて、直に土佐守が宿へ行きて申しければ、折ふし太鼓うち殿にはあらねど、晝寢してこそ居けれ彼の人常々親しく語る中なり、内々頼み置きしことなれば、引ずり起して描かされける。土佐守眠さに堪へず、縦い一夜寢ずとなりとも、晩に描きて參らせんとて起ます。然れども又晩と言はく、飛鳥川の淵瀬と心かはりもやせん世の中なり、ひらにと言ふに是非なく筆取

り、ぐるぐと廻し、刷毛たつ取り、さつと書きてこれくとして臥せりける。望み足りぬと其畫を取つて歸り、捻練り廻してよくく見れども、さらに何とも知れず、水を描きて其中に、一筆ぐるぐくかしたるものあり、さらに見分けられず、餘り合点ゆかざれば、土佐守方へ持行き、何あるぞと問へども、我等も知らずと言ふ。斯かる畫を以て何かせん、引破らんと思へども、三國一出来たり。兎やせん角やせんと思ひけるが、いやく一休和尚に贊を請いて、掛物とせんするぞと、急ぎ大徳寺へ走り行き、和尚に申しけるは、此の畫は土佐守に描かし候か、さらに此水中の物知れず、いかゞ御覽あると申しければ、されば何とも見えねども、贊が望みならばして參らせんと仰せられければ、忝しとて贊を請ふ。一休筆とりて、

水中に物あり、其一物を問へば、書きし書工も知らず、持主も知らず、贅する我は猶知らず。

と遊ばしければ、これを見る人聞く人毎に、さても真する、御心ばせや、無二の物、三國一の掛物あるべしと云ひしが、今に於て其掛物、たゞ人の手に有らずとかや。

○生死問答

さる生媚びたる男、一休の許へ雀を一羽持ち來りて、いかに御坊此雀は生か死か如何、和尚無と答へ給ふ。此者暇も請はず去ぬ、此意は、生なりと言はゞ殺すべし、又死なりと言はゞ放ち遣らんとこの事か知らず、一休其後彼れが方へ行き給ひ、はいり口の敷居を踏み踏んで、亭主くと呼ばれけるとき、亭主出でければ、一休此敷居を

出るが入るかと問ひ給へば、亭主何の返答も出でず、唯だ手を打て笑ひしとなり。

○和尚の川流れ

或時一休かつら川を渡り給ふに、何とかしけん川中にて倒れ、流れたまふに、折ふし川ばたには、人多く集まり居て、これはくと言ひながら、誰一人上げんと言ふ者も無かりしかば、一町ばかり流れて、幸ひに川杭にかより、漸うにて上り給ひしかば、人々寄り集ひさてく御坊は運強き人かな、何として上られけるやと曰ひしかば一休打笑ひて、されば、我れ川へ陥りたればこそ上りたれ、上りたればこそ生きたれ、さまで珍らしき事にはあらざりけりと申さるれば、人々聞きて、さてく口がしこき坊主かなと、ごつと笑ひて打

過ぎぬ。

○泣聲の聞きわけ

山里にて或る者の妻、さる男と密に語り、互ひに情ふかく、契淺からざりけり。或夜の陸言に、いつか何日まで斯くは忍びんや、如何にもして夫を殺して、思ふまゝに契りあんと、互ひに打解けて談合し、たくみ出して、或夜男に酒を強いて酔ひ臥さしめ、夜ふけ人しづまりて後、密夫と二人して、夫の頭に針を打ちて殺し、さて家に火をかけ、焼殺たる休にし、疑ふ人も無きやうにもてなし、死にたる骸に取りつき、聲をばかりに泣叶ひけり、打ふし一休通り合せ、此女の泣聲を聞き、不審の思ひを爲し給ひて、邊り近き人に尋ね給へば、云々と語る和尚聞き給ひて、此女の泣聲は、畏れたる調

子にて、更に悲みの聲にはあらず。不審なりと曰ひて通り給ふ。あにて、今の修行者は、人間にてはあるまじ、昔より今に至るまで慳貪放逸の在所へは、弘法大師の來り給ふと言ひ傳へたり、定めし大師様なりと覺えたり。聲ばかり聞きて其れぞと明し給ふは、奇代ふしぎの御僧かなとて、皆々感じけるとあり。

○祖師の贊

一休和尚は天下の活僧なりしとて、諸宗ともにたしなべて尊びければ、何れの上人長老も崇め給はずといふ事なし、或る時黒谷へ御参りありしに、寺中の人々一休を見奉り、申しけるは、今の世に活佛と、人毎に言へるは此禪師あり、よき柝からなれば、いざや當寺に侍る善導法然の畫像に讃を頼み申す、彼の念佛無間とて嘲ける日蓮

宗に見せて、禪宗の佛心宗だに斯く此方の祖師を尊み給ふと高言せばや。輕き僧なれば、定めて讚し給ふべしと申しければ、各々此儀を然るべしとし相談して、やがて一休を方丈へ請じ申し、件の畫像を取出だし、讚を頼みけるに、案の如く易き事なりと曰ふゆる、直ちに硯と畫像とを御前に出しければ、さらりと開きて一覽あり、筆を執り給ひ、先づ善導大師に讚して曰く、

末法出現名三善導

則是彌陀化身也。

濁世末代導惡人

一切衆生易往生

法然上人には、

傳聞法然活如來。

安坐蓮華上品臺。

尼入道同愚痴輩。

一枚起請最奇哉。

と、即時に遊ばしければ、さてこそとて各々大きに悦び侍りて、此兩佛に淨土宗として、斯く贊を致さば家の事なれば手褒なりとて、又日蓮宗が嘲るべきに、斯る嬉しき事こそ無けれど、彼の鬚を日蓮宗に見せて、大きに威言をぞ申しける。其頃は殊に日蓮宗と淨土宗とは中惡しくて、犬のいがむが如く、牛の突き合ふが如く、眼を怒らしければ、日蓮宗彼の鬚を見て、大きに腹を立て、一休を狙み憎みける。其中一人申しけるは、いや〜一休の御心は、物に飾りの無き直ある御事なり。いざや日蓮大聖人の像を畫かせ、贊を請ひて見ん。彼れほどの褒美は有るべしと、申しければ、尤も然るべしとて、急ぎふためきて畫を措かせ、やがて和尚の菴に持ち参りて、贊を願むよし申しければ、元より輕き御僧なれば、易き事と曰ひ、彼

の畫を開き御覽じけるに、此像は扱も小さくかきて、うそ黄なる衣着せけるよと笑ひ給へば、人々申しけるは、さん候、いかにも結構に大きに措かせたく存候へども、實は先日浄土宗法然が贊を自慢仕候ゆる、口をしく候ひて、取る物も取りあへず、先づちよりけに措かせて参り候、急ぎ贊して給へと申せば、心得たりとて、先の法然の贊を、所々直して、

傳聞日活如來。

香坐則是妙法臺。

尼入道同忍痴輩。

一遍題目殊勝哉。

と成され、其奥に

ばうくす小坊主、まめの粉にぬりばうす

とぞ遊ばされけるとかや。其頃また永觀堂の住持、黒谷の贊のよし

を聞きて、よき寺のかうかつありと羨ましく、思し召し、斯ほど輕き御僧あるに、何が此方にも贊たのみ申さんとて、先づ一山の人々を呼びよせ、談合せられければ、其中一人申しけるは、何と申すまでもあるまじ、先宗の祖師あれば、當寺に傳はぬ半金色の善導大師の畫像に贊を頼まれよと、申せば各々申すやう、げにく是れは代々當寺の重物なれば、これに増したる物あるまじ、さらば其方便僧になり給へとて、彼の半金色の善導大師の畫像を持たせ、一休へまわり、對面して申しけるは、黒谷の贊のよし承り、餘りに羨しく候ひて、是まで参りて候、あはれ此方の善導にも、贊を遊ばし給へと申しければ、それこそ易き御用と、彼の畫をひらき御覽あり立ちながら一筆さらりと筆を給ひ、元の如くにして、使僧に渡されけ

れば、忝けなしとて、謹んで戴き、急ぎ永觀堂へ歸り、云々のよしを申しければ、さても輕き御僧かな、本望とげたり、先づ一山を呼び寄せ、園を拜見せばやとて、やがて人を廻しければ、各々悦び走り集まる。さて彼の畫像を方丈に懸け、拜見しければ、いかにも大文字にて小歌一首あり、其うた、

黒からん衣の裾の黄になるは善導大師はこをたるらん

と遊ばしければ、皆人どつと笑い興をさます人もあり、感にたへたる人もありしが、今の世まで傳へて、天下に一幅の名物となりけるとかや。

○元日の觸體

正月元日より三日の間は元三といひて、殊に元日は、歳の始月の始

日の始ふれば、一天四海の人々の、賢さも愚なるも、憂あるも憂あきも、貴さも賤さも、祝ひ悦ばざるはなく、屠蘇白散に、さぶろくありとも鬢に着け、御鏡すはるとて、尻もちありとも搦きて、それくに、祝ひませる有様は、誠に昨日に異りたるにはあらしども、空の景色も長閑に、霞わたりし大路のさま、松立てわたし家には長き代ためしとて、注連繩引めぐらし、昨日の夜中過ぐるまでは人の門打たよきて、何事にかあらん事々しく、足を空に感ひたるも、たゞ一夜明ぬれば引かへ、心も緩々と、又晦日の來べき心も無し、野邊小松に千代萬世を祝ひ初め、いつ死ぬべきものとは無しに萬の事を忌み恐れ、朝の、露に名利を貪り、夕の陽に、子孫を愛し、蟻が茶臼を巡るが如き、同じ事を、ぐるりと五百七十年、七まがりと祝

ひて、世をあき風の心は、露塵ほども無き人心を、一休たかしく思し召し、誠に愚かなるかな、朝顔の日陰待つ間も、盛り久しき花と眺め、かげろふの青天に羽をふるゐて、樂む間も無き世の中に、糞に箔塗る正月ことば、たゞ時の間の烟となりなんと、打見るより、いで物見せん人々よと、墓原へ往きて、觸體を拾ひ來り、竹の先に貫きて、正月元日の早天に、洛中の家々の門の口へ、此の如しくと、彼の觸體を差し出し、御用心くと歩行み給ふ。皆人忌はしとて、門さしこめて居けるより、今に正月元日は門戸を閉しけるありと曰へり、さらば一休を見まゐらせて、或人の曰へるは、御用心とは最至極あり、縦ひ祝ひ飾りても、終ひには人皆斯くの如し、されども世の習ひにて、斯く舞ひ悦ぶ折に、其穢き觸體をば、家々へ

出さるゝ事は、御ちがいならずやと申しければ、さればよ、我も口ひて此觸體を各々に見するなり、目出たしといふこと、いかゞ心得けるぞや、昔し天照大神岩戸を開き給ひしより、事をこるといへども、此觸體より外に、目出たき事は無しとてよめる。
にくげなき此されこうべあなかしこ

目出度かしくこれよりはなし

是れ見給へ人々、目出たき穴のみ残りしは、目出たしとこそ言ふなるぞ、皆人斯くとはしるなれど、昨日も過ぎし心あらゐに、今日を暮らしてあすか川の淵瀬、常なぬ世なりとは、目に見ぬはしに風の音にも、驚かぬ人々に、用心せよと思へばなり、たゞ人は是れにあらねば、目出たき事は何も無しと曰へば、諸人は是れを見てさても賢

き聖とて、拜まぬ人は無かりけり。

○善惡の質問

七條邊に有徳なる町入あり或る時佛事供養の爲め諸出家は申すに及ばず、乞食までも斯くの如く慈悲を施せり、或る時一休和尚を招待して、種々不審ども尋ね、序に問ふて曰く、何ををさして善とし何ををさして惡とするや、和尚こたへて曰く、善惡限りあし、只善惡を知らんとならば、其善惡を爲す源にあるべし、彼れに行きて尋ねよと答へ給へば、亭主道理と感じんける、さて和尚立ち給ふ折ふし雨降りければ、亭主暫く待ちで雨を止め給へと申せば、一休申されけるは、

降らば降れ降らずば降らずとも

濡れて行くべき袖ならばこそ

と言ひすて、出で給へり。

○魂の質問

或人一休和尚に問ふて曰く、人は死して體無かりはつれども、魂は止まると申するが、左様にてもあるまじは、魂が死あすにあるならば體が無くとも矢張り其まゝ居て、物がたりなども爲さうな事にてあるまじか、何れにしても不思議ある事にて候、我等が存するに、佛になりたる者は、樂みに誇りて、此世の事をば打忘れ、來べき心はつゆも有まじ、又地獄へ行けば、鬼共に苛責せられ、暇は少しもあるまじ、又斯様にても無きものやらん、世の中に亡靈とて、死したる者の來て、さまざまの事を言ひあそすると承はる、これは

如何なる事にて候や、和尚の曰く、されば、我も其儀は知らず候へども、若き時、談義などを些聞たるが、誠か嘘か知らぬ、魂と云ふものが有つて、佛とも鬼とも成るげに候、其曲者が閻魔王とやらんの前にて公事奉行の手に渡り、娑婆にて作る罪を、鐵か銅かは知らねども、帳とやらんに附けて置き、鬼に見せて、先づ是程の罪人なり、急ぎ呵責せよといふに、色々の鬼どもが受取りて、さまざまの責にあはするよし、娑婆にて作る罪ほど責むるといふ、さりながら、毒藥變じて藥とあると云ふ事あれば、さのみ罪の多きも、強ち歎くべき事にはあらじと見たり。

作りをく罪が須彌ほど有るあらば

閻魔の帳につけどころなし

期くあるとには、鬼と云ふものも鈍なるものあり、釋迦が一代の經藏は皆、人間を痛めんが爲なり、あら面憎の釋迦どのや、いろくの嘘をつき置き給へり、それはと問へば一字も言はぬと言ひ給へり又さうかと思へば、出山の語には、一佛淨土くわんけん法界、艸木國土悉皆成佛、艸木も佛になると云ひ、彼地此地と身ぬけばかり言ひちらし、人間は永代迷ひの身に近うしてありと思へば、又諸ふも舞ふも法の聲、柳は緑花は紅、あら面白の春のけしき。

釋尊といふいたづらものが世に出でよ
多くの人を迷はするかな

○神經病全快の御教化

さる坐敷の天井に蛇を描きて懸ける、其坐敷にて酒を飲みけるに、

盃の中に繪のうつりしを飲みて、それより煩ひけり、或る人來りて煩ひのやうを、しかくの事にて、それより斯様に煩ひ給ふよしを聞けりと問ふに、いかにも其通りありと答ければ、或人の申さるゝは左様の事あらば何とも氣分あしくて、起臥も是のみ心にかゝりて煩ひとも成るべし、さりながら左様の事は、一休和尚へ行きて仔細を御尋ねあらば然るべしと存す。さらばとて參り、云々の事にて斯く惱み申すなり、如何なる事にて候や、和尚の御示しに預りたく存じ、是まで參りて候と申しければ、一休聞き給ひて、やがて示し給ふ其語に曰く、

まぼはしを知るるとき敵はほうべんを爲さず一切の諸法は皆是れまぼろしなり、如何なれば水中影像を實なりや想かあり早く汝

が自心をあきらめよ

とて、扇を以て、てふくはたと打ち給ふ、先づ右の意は如と知りなば方便はあるまで、一切もろくの爲すわざは、何事によらず皆空なり。水のうちに寫らふ影を見て、實の蛇なりと心得病となる、それ愚かなる心なり、早く自らの心を収めて見るときは、實か無か顯るべし、其心収まるるときは即ち病本復すべし、と示し給へば、此者やがて得通して、誠に能々思案するに、天井に繪のあると云ふ事思ひ當り、それよりして心快とあり、やがて本復しけり、何事も善惡の源を尋ぬるときは、心の一つより生ずると見えたり、扱こそ三界唯一心と説きたまへり。

○大文字の長くて讀易き字

一休和尚叡山に登り、堂舎を拜みめぐり給ひしに、山法師ども是れを聞きて、一休は隠れなき能書なり、何にても書きて貰はんぞ、手にく硯紙を持來りて頼みしかば、一休思しけるは、聖道の充字とかや、定めて文盲なる法師どもあらんと思はれ、何かな書きて取らせんとて、いかにも讀みがたき一句を、さらく一筆に書ちらしつて遣はされければ、一山の僧寄り集まり、斯かる能書の名僧、此山へ來る事は、後の世までも寶物ともなるべき語を書かせ置くべしとて、其中の老僧といへるは、先より各々書きてもらひけるは一字も讀めず、又語も餘りに短くて此山の寶ともなり難し、いかにも大文字にて長く書きて給へ、讀み難きは有りても詮なし、いかにも讀み易き事を頼み奉ると、一山ともに望みければ、一休曰ひけるは、紙

筆は候か、なかく古へ大師の遊ばしける七八尺の大筆あり、紙は何程なりとも繼ぎ申すべしと申されければ、さらば紙つがせ給へ、御望みの通り長々と大文字を書き、能く讀めるやうに仕るべし、急ぎ紙を繼がせ給へとありしかば、何ほごなりとも紙は御望み次第とて、ひたもの長く繼ぐほごに、叡山の金堂の前より坂本の人家まで長々しくも紙を繼ぎければ、さらば筆を染めんとて、墨たつぷりと含ませ、べたと紙へ書き付けて、一さんに断けて不動坂まで一すじに引かれて、讀めるか法師たちと曰へば、いや何とも讀めぬと言ふ又墨つぎて不動坂より坂木まで一すじに走り引くに、引き引く讀めるかくと喚き給へば、一山の法師たち膽をつぶしいや何とも讀めずと言へば、是れは、いろはのあさきの行の、しの字なり。長々

と書きて讀め安きは見なりと曰へば、皆人興を冷し、扱も聞及びしより戯け人哉と、一度にぞつと笑ひて澁じけるとなり。今の世までも其しの字、叡山の寶物となり有りけるとなり。山法師たちも望みし事なれば、いやとも言はれぬ御作意と皆感じけるとあり。

○錢ほごこしの制札

一休和尚在世のとき、下京松原通の中ほごに制札あり、其札のこしらへやうは、板を丸竹に挟み、其竹のように錢を一ばい入れ、札の書きやうは、

- 一 餅食いたがるものゝ事
- 一 酒吸ひたがるものゝ事
- 一 茶のみたがるものゝ事

右の通くいたくば買ふて食ふべし只世の中は皆錢也已上

年 號 月 日

斯やうに書つけ建てありしが、一休折ふし通りて見たまひ、さてさて、めづらしき制札かな、いかさま是れは子細あるべしと、立寄りて窺ひ見たまふに、尋常の制札とは異り、柱を竹にてこしらへたりしは心ありげに見えたりとて、供の者に汝は此札を取て歸るべし我少し思ふ子細あり、早とくくと仰せらるゝ、男申すやうは、是れは和尚様とも覺えざる仰せられ事かな、假初にも是れは定めて公儀よりの制札ならん、然るを、むげに奪い取て歸らば、後の禍いかゝあらん、我等にたいては御免あれとぞ申しける、和尚聞き給ひ、汝が言ふは理りなれども、さりながら子細を知らねば恐くも道理なり

先づ此札を挟みたる竹の内に錢あるべし、此札奪ひ取べしとの書付あり、早く取りて歸るべし、若し崇りあらば、汝が身には咎はかくるまじ、此一休が心に任せ置くべし、且は我れ頭をまん丸めし身なれば、半錢も身には附けじ、皆汝が穴一錢に取らせん、早や取れとれと勧め給へば、彼奴も欲しくや思ひけん、さもあらば取るべしとて走り寄つて押し倒し、先づ金目を引て見て、適れ和尚は神通にてましますぞ、悦び勇み打かたげ、夫れ世の中にて濡手で粟を掴むとは、斯様の事を謂ふらんとて、千鳥足にて紫野へぞ歸りける。其後公儀にて、制札を一休奪取り給ひしよし、ほのかに聞し召し、和尚へ使を立てられけるに、和尚畏つて、やがて目代へ上り給ふ、奉行の曰く、いかに御坊、何とて往還に建てし札を奪ひ取られけるぞ、

一休されば、制札の表を見候に、餅酒欲しくば買ふて食ふべし、世の中には錢がある程にと書かれ候、さても御公儀は御慈悲にましますかあと、有がたく存じ、殊に貧僧の身あれば、取て歸りて候と申さる、奉行聞し召し、根本これは君より御慈悲の爲めに、國々に建てられ、此書付の面を能く合点いたしたる者は、此札を奪ふべしとの支度なり、よし歸り給へ、畏りて一休は紫野へぞ歸り給ふ奉行の曰く、さてもく、彼の坊主ならでは、斯様の札を引抜くべき者は覺えず、縦ひ意義を知りて奪ひたく思ふとも、兎や角と思案し、或は世間を憚りて、即時に奪ふべきものは稀なるべきに、何の憚りも無く奪ひしは、きたいの坊主かな、末の世に至るとも、斯様の坊主は二人とも、あらしと感じ給ひけり。

○死後の質問

成人一休和尚に問ふて曰く、何と和尚様、つくづく人間の境界を案ずるに、皆我々が知音といへども、幾人といふ數も知らず、大かた先だち行けるが、終に誰あつて言傳ありといふことも聞かず、如何やうの處に何とやうにして居ると云ふ事も無し、これのみ心元なき事どもなり。やうく彼地此地とする間には、羊の歩み近づき、車の庭にめぐるが如く、我々が番に當り申さん、歎かはしき事どもなり斯様にあるときは、死しては先づ、何に成り侍るぞ、一休曰く、死して後いかなるものとなりぬらん

飯酒團子茶とぞなりける

と仰せられければ、此人また和尚の悪口、例を出し給ふと、とつと

笑ひけるが、又傍なる人の言ひけるは、さりとして御坊、此歌の意義面白く候が、また行くもあり、行かざるも候よし、これは又如何なる事やらん、序ながら聞かせ給へ、和尚は之に應じて、とゞまると思はゞ其處にとゞまれよ

行くと思はゞとくくとゆけ

と言ひすて歸り給ふ。

○四十からの引導

一休和尚の庵ちかき邊りに、四十からと云ふ小鳥を養ひける人のありしが、物のあたりにや、生あるものなれば死する期ありて、籠の内空しくなれり、朝夕愛し手あれし可愛さに、殊の外不憫に覺えいと悲しくて、子に別れたる思ひを爲せり、凡そ非情無心のものた

にも、谷々佛性を具せり、況しちや生あるものをや、死出の山三途の河、冥途の闇いかゞ有らん、然るべき智者を頼みて、引渡渡さばやと思ひ、一休和尚の庵へ参りて、云々の事頼み申したきよし歎きければ、折ふし和尚の弟子出あい、いと易き事なり、いでく成佛得さんせとて、佛前に向はせ

ひかし釋尊八十三ばつたい河に於て寫樂に入る今なんじ四十から紫野に成佛をとく

と高らかにこそ授けける、彼の者頼もしく思ひて、やがて葬りて歸りぬ。是れを一休ものごしに聞こしめし、只今の引導は、能く出かしたる小増かな、風骨によると思し召し、大きに悦び給ひ、機嫌よきことを斜めあらざりしとかや。

○波風立てぬ和尚のはからひ

雲州大原と申す所に、ゆるりや藤太夫と申す者あり、久しく京都に住みけるが、元來出雲は生國なれば、又本國に歸りて住みけるが、京より國へ下りさまに、妻を娶りて下りける。此女京にて、ねんごろしける男の方より度々便りを伺ひ、互に文の通ひありけり。此よしさる者密に知らせば、男或る時數多の文どもの有りけるを取り隠しけれど、我は一つも讀めぬ無筆なれば力無く、誰にか是れを見せばやと思ふに、頼むべき人も無く打過ぎしが、折ふし一休、此藤太夫が近所にましますに、やがて和尚を請じて、よき序なりと思ひて件の文ども取出し、御坊様、内々あがら御存じの通り、某は目を持ちながらの明目くらに等しければ、此ふみ少し仔細ある事にて候ゆ

る、一々讀みて結はれと申しける。一休易き事なりとて、此文どもを讀みかへて、只尋常の文に讀みなし給ふ、時に此男、さても苦しうなき文どもなり、餘人の讀みたらんには、疑ひもあるべきが殊に和尚の讀み給ふ上は、さらに詐り給ふとも思はず、さては人の言ひひしは皆詐りなりとて不審を晴らしけり。此女和尚の恵み、あまりの嬉しさに、密に禮ぶみを遣はす序に

信濃なる木曾路にかけし丸木橋

ふみ見しときはあやふかりけり

と嬉しさのまゝ書きて遣はしける。一休和尚の返事に

見しときはいかある事ととふ太夫

讀みをはりては心ゆるりや

これより彼の女、ふつ／＼身を慎みけるとなり。

○秘薬の高札

京都に口痺の妙薬を覺て税藏しける者ありけり、一休効能を聞し召し、いかにもして知らばやと思召され、やがて訪ねて、其者に逢ひ給ひ、しか／＼の御薬を知らせ給ふよしを承り及び候、あはれ此愚僧え御相傳下されたしと存じ、はる／＼是まで尋ね参り候と申されける、彼の人承り中々の事に候、此妙薬と申すは、我等代々傳へ來り、一子相傳の秘方なれば、他に漏らすこと思ひもよらず、さりありがら、貴僧はゆゑしき御僧と見奉れば難み難くこそ候へ深き御執心にて渡らせ給はゞ、他に口傳あるまじき御起請を書かせ給へ然らば許して、教へ申さんとぞ曰ひける、和尚聞し召され、我が身

の大事一代一紙の誓文あれども、愚僧に教へて給はらば、心得候とて、墨ぐろにこそ書かれけれ、やがて習ひ得て庵に歸り、あざ笑ひて曰ふやう、人の病に薬とあるべき物を秘藏して、獨り覺わたらんには、慈悲の疎き心あり、是等の事を秘藏とせば、恐らくは秘しても秘し難き一大事の因縁をば如何せん、さりながら佛神の冥罰、そら畏ろしよ、さらば札を立て、世に知らさんどて、

一口痺のくすりの事もし口痺を病むものあらば、かあらず蜜柑の實を黒く焼きてのむべし、治る事すみやかにしてふたよび發ることなし是れ希代の大妙薬あり、

と書付け建てられける、さて教へける男これを聞き、以ての外に腹を立て、脊骨を怒らして急ぎ紫野に走り行き、一休を探ね出しいか

に御僧、破戒無徳の賣主坊主かあ、何とて大事の秘を習ひて、他に口傳すまじと、起請を書きながら剩へ高札を建て、萬人の目にさらす事、いかある曲事ぞやとて、打果しても忍びがたしと、眞黒になつて怒りければ、さしもの一休なれども、ためき殺すかとぞ見へにける、されども和尚は驚くけしきも無く、そらさぬ顔にてもてあしあらしの有様や、何事を斯は曰ふらん、起請を書きしも誠あり、又札を建てしも詐りにあらず、さりながら、口傳すまじと書きぬれば、一人にも口傳せざるなり、札を建てじと書かざれば、建てたるが誤りか、起請に少しも背かざれば、佛神の罰も恐ろしからずとて、空うそぶひて在しける、彼の者飽くまで罵り、怒氣に冒され、方寸に迫りけるが、一言の振句に返答を奪はれ歸りける。

○ 蹈にじり繪像

一休和尚と等しき沙門ありけり、我が繪像を自ら書きて寫し、心づから一入能く出來たるよと嬉しくて、さもあれ一休に見せばやと思ひ、急ぎ紫野に持てゆきける和尚此繪を一目見給ひ、あな見苦しやとて目を閉ぢ、大きに嘲り給へば、いかなれば所存をも顧みず斯く笑ひ給ふぞと、打腹だちて罵りける、其時畫像を取て庭上へ投附け、土草履を穿さながら、散々に蹈みにじり、

世をすてよかたちをすてず、びんばつをきりて煩惱をきらす、かりに畫像をかきてたのが惡業をかすけ置く、畫像大なるめいわりくなり。

と黒々ぞ賛を書きて渡されける、沙門はつくづくと感じて、やがて懷中して歸れり。

○ 正直佛の御教化

五月雨の降りつゞき、はれ間も見えず打しめり、四方のけしき潤ひ、梢も見わわかたぬ徒然わびしく思しけん、柴の戸をさしこみ、坦然として在します處へ六十あまりの男と見へて、破笠を被り、いかにも思ひ餘り、憂ひに沈みたる有さまにて、靜かに物申さんと伺がひける、一休は、誰ぞや此方へと曰ひて、柴の編戸を開き給ふ、彼の男曰ふやう、我は近きあたり侍る者なるが、明日はさる志ざしの日相當り候へども、智識をたのみ奉る方無く、候へば恐れながら和尚を請じ奉り、粗末ある齋を參らせ上たく候て、是まで頼み

来り候ありと、思ひ入てぞ申しける、和尚聞し召し、固より出家の
 營みにていと易きことなり、何處のほどぞと問ひ給へば、男こたへ
 て、さん候、我家居と申すは、濁り川通、底抜柄杓町と申して、隠
 れ無き所にて侍るなり、尋ねてわたらせ給はゞ、門に印を置き候へ
 し、必ず待ち奉り候とて、暇申して歸りける、一休後にてつくづく
 案じ給ひ、彼奴は不審なる教様を言ひつるものかな、さらば了簡し
 て見ばやとて、やがて意義をぞ覺られける。抑も濁川とは今出川あ
 るべし、底抜柄杓町と言ひしは、るがわ町と言ふあるべしいでぐ
 尋ね行きて見んとて、思ふ當ごを問ひ給へば、案にたがはず、るが
 わ町といふ處に行あたらせ給ひける、印といひしは何なるらんと、
 見給へば、表に杓子を吊りたり、是れぞ印なりとて、やがて内に入

りて見給へば、昨日の男に會ひ給ふ、目出たかりける事斜めならず
 我等の愚かある戯れを申し參らせ候へども、一々に解さわかち、道
 をも迷はせ給はず、御入り候こそ詐りも無き天眼通にてたはします
 とて、偏に釋迦の如くに思ひける、男も癖者にて、難かしく難問を
 掛けんと思ひけるが、法事も過ぎぬれば、膳を出して据ゑたりける
 、其時和尚膳にむかひ、殊には亡者法味のため回向を爲して、三界
 に手向けんと、蓋を開けて見給へば、飯にはあらで小糠あり、不審
 に思し召され、汁の蓋を取りて見給へば、是れも同じく小糠なり、
 残りの物も皆々糠なりければ、横手を打てあら痛はしや、さては亡
 者の三七日に當り候よとて、頭も振らす曰ひける、男はいよく膝
 を消し、恐れを爲して敬ひ、さて曰ふやうは、仰せの如く、某は父

を喪ひ候て、三七日になり侍る、佛果にや至りけん、若し地獄にや
 落ちぬらん、後生の事覺束あくて、悲しく候と問ひければ、一休仰
 せらるゝは、何事かあるべき、只存生の行為をば他人は善しと譽る
 や、悪きと毀るや、如何言ふぞと密に曰ひければ、されば、平生は
 常に邪なる事候はず、偏に正直にて、全き性なれば、他人は佛に
 でありつると譽むる者多く候と申しければ、一休聞しめし、然れば
 氣づかひなる事あり、是れ阿彌陀にもあらず、覽音にもあらず、即
 ち正直佛あり佛果を得ること疑無しと、事も無げに仰せられける
 男つくくくと承り、さては心易く候、又某が兄にて候もの三年已
 前にむろしくありしが、常に佛道をも知らず、徒らに明し暮し、恥
 かしあがら天性愚鈍にして、人の口に振り者と名を得候事、口惜し

き次第なり、但し罪も作らず候へば佛果を得候はんやと、問ひける
 一休聞しめし、なか／＼罪咎無しと雖も、佛には成り難し、左様の
 者、愚僧が許しても人が許さざれば、其落どころの地獄を即ち阿房
 地獄と謂ふなり、但し今生の如く後生の事も有れば、佛果と地獄と
 少しも疑ふこと無しと仰せられけり。

○諂ひを誡むる御教化

さる處に何ともあらざる邪氣なる男あり、身も裕にて奢り暮し、万
 不足なく、殊に下人を多く持てり、餘り我儘を言はんとて、表の入
 口に法度書をしてけり、其札に、

- 一 へつらひあつて奉公はしがちの事
- 一 つかひたをしの事くひたをしの事

一 たんはとりがちもらひがちの事
 と、斯様に書きて建て置きけり、或時一休和尚を迎へて、万の語終
 り、一休申さるゝは、何とこれの表には、珍らしき札を書きて建て
 給ふ、彼れは下々へ法度書にて侍るか、亭主をかくと答ふ、一休
 たかしく思ひ給ひ、やがて歸りさまに、
 へつらひて樂しきよりも誂はで食しき身こそ心やすけれ
 斯く書き添へて、密に歸られたり。

○人の人たる御教化

或人一休に問ふて曰く、世の中の人の申す事にて候が、人の人たる
 と云ふ事は、わかある事を申し候や、一休答へて曰く、されば、此
 坊主は知らず、足らぬ身にて候ゆる、何を知らず、況てや人の人

たる事を知るべきや、さりながら若き人の心ざしあつて、やさしく
 も尋ね給ふを、知らぬと曰ふも異なものにて候、昔し物知りたる人
 の話を、ちと聞はつり置候ほどに、申して見候はん、先づ人には、
 人たる人と、人たらぬ人と候が故に、人たる人を人と申すげに候、
 たとへば鷹などの鳥を能く取るは鷹の鷹たるに候、鳥を得取らずし
 て鼠を能く取るは鷹の鷹たるにて鷹とは謂ひ難し、猫の鼠を能く取
 るは猫の猫たるにて候へ、若し又鼠をば得取らずして肴を盗
 み食ひ候は、猫の鼠たるにてこそ候へ、猫の猫たるとは謂ひ難し
 、人の人たるとは、人の道を知りたる者を申げに候、又問ふて曰く
 、學問に請賣とす事の候、これは如何なる事にて候や、一休答へて
 曰く、されば是れも確とは知らざる事ながら、申して見候はん先

づ請賣と或すは、或は四條五條の辻に、小間物店とて、棚一つに種々様々の物を取集め置き、人の用次第に賣る者の候、此者に一種にても誂へて見候へ、何れにても我が職にあらずして、皆上手の仕置たるを請賣にゐたし候間、御用あれば其人に誂へて參らせんと言ふが如く、學問にも請賣の人こそ多く候へ、誂へて行はん人は秘にこそ候はめ、殊に老子莊子諸子百家の沙汰までも取まじへて評論し物識と罵るは、皆小間物店に似てこそ候、買手の爲には用こそ立つこともやあらん、賣手は然せる物識る人にて候はじ、一言一句にても我物にして守り行ふ人は、遂に勝れて有難かるべしと申さるゝ時、此人つくくくと聞居て、さても理りかゝるとて、あつとばかりに感じける。

○踊の難

頃は七月十五日の夜、若もの、飛上りの後先知らずの男一兩人申すやうは、ゐざや方々一休の方へ行き、夜すがら慰さまんと申す、一人が申すやう、されば、我等も左様に存する處、よくこそ申し出されたり、彼の坊主も、浮きに浮きし坊主の事にしあれば、今宵は殊更十五日、ゐざく往て浮からかさ、尤とて打連れて行くほどに折よく和尚は寺に在して、何れも能くこそ參られたれ、祝儀ありとて、早や酒盆を出されて、舞ひつ誂ひつするまゝ、一休立ちて踊られける。

竹の切よの溜り水、澄ます濁らず出さ入らず、人と契らば薄く契りて、末まで透げよ紅葉を見よ、淡いが散るか、濃きぞ先づ散る

もので候踊れやく人々よ、若いが復びある身かや、只何事もか
 ごととも若き時には誰もかも、徒ら狂ひは有るものよ、其れも苦し
 いものでも御坐らぬ、毒藥變じて薬とあり候、何を歎くぞ川端柳
 、水の出ばかを歎き候、其れを歎かは歎かうまでよ、巳等が身に
 關る事にてあらばこそ、牛は牛連れ馬は馬づれ、あだる浮世は何
 んなものぢやと破扉の拍子を取て、唄は唄へ舞は舞へ、釋迦
 の御妻は耶須阿羅女、く、よい人々や、よい人々、

と、踊りをさめ給ふ、皆これを見て、さてく御坊の踊を、久しぶ
 りにて見候、歌の性が一段たもしろしとて、一度にごつと笑ひけり
 いざく此面白さに、町へ出て踊らん、御坊も同道申すべし、一体
 心得たりと、太郎次郎と申す下人を従れ給ひ、巳上四人の人々、思

ひくに出で立ちしが、先づ和尚の装束には、かつたいかきの布、
 投頭巾、紙子の袖無衣羽織、腰には九寸五分に瓢箪を、ぶらりしや
 りと、提げられけり、脇差は門前の彦六が一子た竹が萬蒲刀を、兼
 平ざしに閃きわたして出で給ふ、さて踊は五條の橋より、四五町西
 にあり、此處を屈強の踊場ありとて、打まじりてこゝを先途と、踊
 らるゝ、二人の連も見失ひ、たゞ主従にこそ成り給ふ、足元も四途
 路になり、若き女の方へ、ぐらくと轉び給へば、女も共に土摺む
 、かの夫が是れを見て、卒爾なる曲者かな、逃すまじと言ふまゝに
 、大聲あげて打かゝる、一体も心得たりと言ふまゝに、大肌ぬぎに
 肌ぬぎて、大手をひろげて蒐られけり、五人三人取つきて、彼方へ
 ひらく、此方へむらくと押返し、押戻し、暫し捻合ふ其ひまに

、頭巾は早や破れ飛びければ、紙子は後ろの裾よりも、頸部まで引破り、前後不覺に絆きけり、斯かる所へ、太郎次郎は見るよりも、任せたりと言ふまゝに、大肌ぬぎて、相手の脛かと思遠へて、御坊の脛を無手と取り、曳やつと言ふて引くほどに、御坊仰向に打倒れ、腰に付けたる瓢箪も、微塵になつて失せにけり、大勢打寄り狼籍はさせまじと、我もくと、走り寄る、やがて御坊は起上り、束をさして逃げらるゝ、下帯外れて蹶躓き、命からく忍びて寺へ歸らるゝ可笑しかりける事どもなり

○法衣に料供の御教化

京都の大富家の許にて、大事の吊ひを爲しけることありしに、導師には如何なる僧をか請じ奉るべきと、思案まぢく暮らしける、

其頃名高き智識數多はしけれど、中にも紫野の休和尚に如くはあらしと、明日は法事になりければとて、急ぎ人を遣はしける、折よく和尚庵の塵を拂ひ、庭の掃除してはしけるが少しも、泥まぬ御僧なれば、心やすく領掌し給ひけるが、思しよる事のあるにや、やがて乞食に身を糞し、手足に煤をにじり付け、敗衣を纏ひ、藻屑の中より出でたるやうにて、彼の門に立ち給ひ、乞食の言ふ如く、御供養の御施行を賜へ、御慈悲を下されよと、とりくに曰ひける、亭主邪見に腹を立て、見苦しき奴原逐ひ出せよと下知しければ、其時下男二三人走り出で、供養は明日の事なるに、今日来て喚く曲者やとて、固より其れとはいざ知らず、痛はしや休を打き出し奉り、さんぐに打擲し、蹈倒してぞ入りにける、休は辛き

命をやうくに助かり、無殘の所爲と思しめし、紫野へと歸り給ふ、明日にもなりければ、昨日のさまに引かへて、新たに湯あみし給ひて、衣を更め着されつゝ、七丈の御袈裟を裾長に引かけ、金襴まじりに取つくらひ、固より殊勝に見え給ふ、一休御こし給ふぞと言ひ込めば、亭主大に悦び、佛前へこそ請じける、然れども是尙進み給はず、いや其れまでは參るまじ、愚僧はこれに候とて、石臼にあり、にじり給はず、亭主は悶えて、是れは何事にてたはします、あら忌はしや此處へは下郎の席なり、此方へ通らせ給へとて、手を引たて奉れば、一休御覺じて、然らば此衣に料供を賜はるべし、愚僧に賜はるべき仔細おしとて、

はうぼくの三十棒を當てられて

身に美衣着たる蟬の脱殻

と、一首の狂歌をよみ給ひて、乞食も愚僧も同じ火と水あれども、昨日は棒をくらひ、今日は御齊を賜はる事、偏に此衣の色が光る故ありとて、脱ぎ捨てゝこそ歸り給へり。

○不思議を有難がるを誠むる御教化

一休和尚は活佛にてましますと世上に風聞しけるが、餘りに譽めてさる人申しけるは、此間一休和尚の許へ参りければ、能く來ると曰ひ、虚空に座し給ひて、御庭の松の枝に御腰を掛けられ、御進みなされしなり、不思議なる事にあらずやと、無き事がざりて語りければ、皆人それは偽にこそ、人間と生を受け、斯かる自在のなるべきやと取沙汰しける事を灰に聞し召し、一條の辻に札を建てられし書に、

佛法の修行すでに道なり、天眼通を得たり、虚空に座せんとすれば則ち座し、座すまじと思へば則ち座せず、通力自在を得たり、若し疑ふ人あらば見物すべし、

と、書かれたり、皆人これを見て此中人は評判しけるが、斯く書かせらるゝ上は、更に疑ふ所あり、さりながら魚を食ひて生かして吐くと仰せられしも誠ならず、尤ある事にてやあらんといふ人もありしが、いや／＼其れとは品かわりたるごとく、媚びたる人二三人連立ち、一休の庵室へ行き、御札の表疑ひは有るまじけれど、直々拜み申度候て、是れまで参りたりと申す、一休出會ひ給ひ、なか／＼の事天眼通を得申候と仰せられければ、其中に勝れたる者進み出で、申しけるは、是れは詐りにてあるべし、虚空の事思ひもよらず、先

先づ此扇の上に入りて御覽あれと申しければ、いと易き事あり、さりながら其扇の上へ上と思ふ心出れば上る今日は早天より上らふと思ふ心無し、虚空へも登らんと思はねば登らず、重ねて御出あれ、登らんと思ふとき登りて見せんと仰せられければ、皆人呆れて歸りける、其中の人申しけるは、いかにしても一休様を、人の餘りに譽めんとて、天眼通を得給ふと曰ふを可笑しく思しめし誠め給ふなりと、感じて歸りしとなり。

○話則の傳授

或る檀徒來りて申しけるは、此御寺へ出入いたし候人々申しけるは、話則の一則も卒業たるか杯とて、我等の愚痴なるを侮り、何とも迷惑いたし候間、何にても一則、御慈悲に示し給へと申しければ

、易き事あり、さらば参じられよと有りければ、参ずるとは如何なる事にて侍ると申す、いや何なりとも佛の道にて合点の行かぬ事を尋ねられよ、畏つて候とて、佛殿さして走り出る、和尚たかしく思しめし、見ぬ顔してはしける、刹那の間に走り歸るを、いづくへ行かれしと曰へば、佛の道に不審あらば仰せと仰せられしに依り、佛の道とは佛殿ほ行く道ありと存じ、一走り見て参りしが、いかにも合点の参らぬ事こそ候、彼の山門の通りの松に巢を懸けて候が、何の巢とも更に合点参らず、大方鷲の巢とも見えて候へども、確と辨へず候と申しければ、いや／＼鴉こそ今時分に巢を懸くると曰へばいや迎もの御事に御慈悲を垂れて示し給はれと申しければ、其儀ならば梯子を持って上り見給へと仰せられければ、彼の者急ぎ上りて

、彼の巢を下ろし見れば、中に鳥の子も無く、何とも見えぬなり、一休何なるぞと曰へば、何も中には御座なく候と申せば、

鷲の巢を下ろして見れば鴉にて

とよまれ、是れに附けて見給へ、こゝが一則なるはと仰せられければ、彼の者なが／＼何と申すべき意は無しと申ければ、一休仰せられけるは、其處なるは我も汝も一則授け知らずべき意は無しと示し給へば、彼の者驚き、さては一休和尚様も仰せられ難く侍るかぞ申しければ、

自心自佛

と答へたまへば、横手を打て歸り、終に自得しけるとなり。

○和尚の春情

一休和尚つぎうしやうこう頃ばるしも春はるの半なかの事ことなるに、花はなに心こころを寄よせ給たまひて、幾いく枝えだも集あつめ、花籠はなかごに立たて雜まじへて、酒さけを飲のみり、心こころも若わか々とありてたはする所へ、檀徒だんたの奥方おくがた参まゐりける、能よくこそ來きり給たまひしとて、酒さけを飲のみ進すすめ、たかしき事ことなど御話おんはなしありて、ひたもの酒さけのみて遊あそばれければ、日ひも早はやや西山せいざんに、たちこちの便たうきも知らぬ御寺みでらに彼の女房にようぼう話わも、べんくと話はなし居ゐける、和尚わしやういかゞ思おもしけん、今宵こよひは御泊おんしやまりあれと仰おほせられける、女房にようぼうの申まをしけるは、かりそめに参まゐり、長ながあそび仕候しこうさへ何なにとやらん似合にちあはぬやうに侍まゐるに、一夜いちや泊しやまり申まをさば浮名うきなや立ち申まをすべし、其上そのうへ夫むとある身みの事ことに候まをへば、いかに心こころは然さは思おもふとも叶かひ難がたく侍まゐる、先まづづ御ごいとま申まをすとて立歸たちかへりしを、一休いつしやう袖そでにすがり、平ひらに今宵こよひは泊しやまり給たまへと引ひきとめ給たまふに、女房にようぼう申まをすやう、今までは一休いつしやう様さま

は生釋いせしやう蓮れんのやうに思おもひしが、妾めかけに御心ごこころありて止とどめ給たまふかや、狂くるがる仰おほせかなとて申まをしければ、一休いつしやう笑わらひ給たまひて、其方そのなたへ心こころをかくればこそ、愚僧ぐそうも是非せひにと留とどめ申まをせ、心こころがけぬ者が御泊ごしやまりあれと申まをすものかほととられければ、沙汰さたの限かぎりや、夫むとある身みが斯かかる事こと侍まゐるべきかと、ふり切きつて輿こしに乘のり、立歸たちかへりける、さて夫むとに會あひて一休いつしやうは佛ほとけのやうに思おもひ其方そのなた様さまも思おも召めさんが、いたづらある御坊ごぼうあり、妾めかけに酒さけをすゝめ給たまひて今まで引ひきとめ、剩あまつまへ今宵こよひは一夜いちや泊しやまれと切きつに仰おほせらる、必かならず彼の寺てらへ参まゐり給たまふと、二心ふたこころなき意見いけんを繰返くりかへしく申まをしける夫むとは然さるものにて、手てを打うつて笑わらひ、さりとは佛ほとけあり、汝なんじが斯かくいふも理ことばなり、能よく思おもひ見みよ、如何いかなる者ものにても、我われを頼たのむ檀徒だんたの女房にようぼうに馴なれしげに、一夜いちや泊しやまれとは、なか／＼出家しゅつぎの身みにて言いひ難がたし、

縦し一休和尚と枕を並ぶるとも、今生後生のうつたね成るべし、我等を兼ね侍らす、急ぎ行きて一夜遊び給へ、おにくの誓言ぞ、我等の妬心は無しと申せば、然あらば引かへし参るべし、御悦びあるべしと申しければ、急ぎ参りてゆるくと和尚を慰さめ給へと、申しければ、女房悦び一間の處へ立籠り、白粉口紅、狐の化けたるが如く引つくるひ、衣裳を飾り、急ぎ輿に乗り、一休へこそ参りければ、一休早や寝ね給ひしに門ほとくと打く驚き立出で給へば彼の女は、いかにも細々としたる聲にて、前には是非に一夜泊れと仰せられけれども、夫の心うかゞわしくて、振り切り立歸りしが、餘り御残り多くて、夫に暇を乞ひ候へは、苦しからぬと申す故、御羞かし

ながら、泊りに参りたりと申せば、一休いやく、最早いやにて候、御歸りあれ先程は其方へ心かゝりたるが、早や心かゝらす候、早や御歸りあれ、御歸りあれとて、門戸を堅く閉め、音もせず、さりとては御ふり候かと申しけれども敢て音もせず、是非なく歸りて夫に云々と語りければ、然あらんと思ひけること、笑ひて、天下老和尚あり、心動くときは動かし、動かざれば動かし給はず、最早いやとは、誠に行く水の如き御心や、いさぎよし、兎角凡人にては無しとて、いよく尊ひける。

○性靈棚の御教化

一休知尙の時代までは、方々の寺々より、七月十四日には内裏へ灯籠を捧げよる、大徳寺にも開山大灯國師より、故ありて捧げしかば

後々まで例になり、止め難くありければ、一休小難しくや思しけん、或時内裏へ灯笼を上げるとて、狂詩を一首つゞり、灯笼を添へて捧げたまひけるが、

性靈今日出来迎

雨露直供万葉棚

掛得燈明天上月

松風流水讀經聲

と遊ばしければ、帝勅覽ましくて、誠に一休の詩なるものを、要あき灯笼をも留めけるなり、自今以後大徳寺よりも、何方の寺も七月に灯笼を捧ぐるることあるべからずと仰せ出されけるとなり、世の人これを聞き、さてもく名僧かゝ、斯かる御心ざしにては、定めて御寺にも性靈祭はあるまじ、若し有らば然こそ異りたる事にてやあるべし、いざ人々一休の御寺へ参りて、見物し、末代の語句とは

爲すべしと、四五人づれにて参り、一休に御目にかゝり、此間禁裡へ捧げ給ひし灯笼の詩、洛中にて是のみ沙汰仕候、定めて斯かる御心ざしにて候はゞ、性靈祭も遊ばしはすまじと申しければ、いや、一我等は三界の衆生を思ふ故に、有縁無縁の悪鬼を祭りて、種々の物を手向け候ゆる、廣大無邊ある性靈祭仕ると仰せられければ、皆人案に相違して、此御寺には見え申さず候が、何れにて御祭り候ぞと申しければ、是より四五町わきを借りて候と仰せらる、皆人申しけるは、とても御事に見物仕度候、御人添へられ下されよかしと申しければ、奇特なる事を言ひ給ふ方々や、人までも無し、我等同道申すべし、水むけし給へと誠しやかに仰せられければ、皆々悦び、御跡を附きて行きければ、東の河原へ御出まつて、これく見

たまへとて両手をひろげ給ふ、皆々、何處もとにて候ぞと、うとう
をしければ、一休是れ見給へとて、くるくると舞ひ、手を廣げ給へ
ども、皆合点ゆかざりければ、各々は見物がなるまじきぞ、説いて
聞かすべし、只耳にて御聞あれと仰せられければ、皆人呆れて立居
たり、一休一段調を上げて仰せられけるは、

山城の瓜や茄子を其まゝに手向にあれや賀茂川の水

聞き給ひけるか、是れ大なる性靈棚にては無きかと仰せられければ
皆人さてもく、いやとも言はれぬ御意やとて、感に堪へて歸りけ
る。

○五戒の御教化

或時蜷川新右衛門來りて佛法話などして遊び居けるに、一休の仰せ

らるゝは、今どきの出家は心ざし薄し、佛は五百戒をさへ持ち給ひ
しとかや、せめて其數取の五戒をば能く持つべき事ありと曰へば、
新右衛門申されけるは、眞に沙門は申すに及ばず、俗の上にてもせ
めて五戒は持たたき事に候と申すに、一休いや俗は是非もあき事な
り、出家には持たせたく思ふあり、さりながら、目に見て耳に聞ゆ
るもの、五戒を持ち難し、僅か一尺の扇さへ五戒を破るあれば、況
して僧俗、生とし生ける者、持ち難きは理りなり、新右衛門これを
聞きて、此扇子さへ五戒を破り候や、なか／＼破りたり、是れ亦和
尙の出來口にて持らん、いで一々問ひ申さん、答へて聞かせ給へ、
いつもの御頓作の御輕口、うけ參らせんと申しければ、さらば一々
問ひ給へ、新右衛門問ふて曰く、

如何是れ殺生戒

答へて曰く

竹を切りて骨をばさるるや

如何是れ偷盜戒

答へて曰く

虚空の風を盜まざるや

如何是れ邪淫戒

答へて曰く

かきめごとく合はせずや

如何是れ妄語戒

答へて曰く

繪くら事を書かざるや

如何是れ飲酒戒

答へて曰く

開いてさん言はざるや

是れ扇の破戒ならずやと仰せられければ、今に始めの御口ありけれ

ども、一入有がたく存じ奉る、さりながら五戒のうち偷盜戒の御答に不審致度候、和尚の曰く、如何ある不審候ぞや、新右衛門の曰く古語に

扇是れ日本風

風不れ日本風

と聞くときは、扇こそ日本の扇を動かさめ、風は日本とは眼らず、千里同風とあるからは、盗む所否やと、戯けて一句申しければ、一休、新右衛門と曰ふ、やあど曰ふ、音も無く香も無き人の心にて

呼べば答ふるぬしも盗人

と遊ばしければ、さてもよき御口や、先程よりの問答を、御難かしあから一筆遊ばされとて、書いてもらひて、其まゝ掛物にせられけ

るとなり、此掛物都の中に持ちたる人あり、これを寫す。

○宙にぶらりの御教化

或人一休に問ふて曰く、何と和尚様世の中に化物は人毎に寄持不思議と申すものと覺候、左様にて候や、一休答へて曰く、いや、只宙にぶらりと答へ給ふ、此男大に腹を立て、さても御坊は聞え申さぬ御返事かな、夫れ人の物を問ひかくるに凡之法こそ有るべきに、宙にぶらりと云ふ挨拶は遂に承らず、それは人をあぶり給ふか御出家には似合はぬ氣分や、是非とも此上は仔細を尋ね出さで置くまじ、坊主とはいはせまじ、諏訪八幡も御示現あれと大いに怒り、申しける、一休此有様を見給ひ、さてもく其方は短氣ある、恐ろしき人かあ、其方のやうなる人とは物の話もあらぬ、先づ能く合点

して見やれ、其方は、物の不思議を問ふ故に、其方へ幾度も解し聞かする事なるに、同じ事を又も言ひ、又は言ひ納めざるに、合点の行かぬ人かあと思ひて、只今のやうに返事いたす事なり、物の不思議を立つれば不思議不思議も無しと思へば不思議ある事は一つも無し、又佛も神も有りと思へばあり、無しと思へば無し、されば有るにもあらず無きにもあらず、さて有るきは宙にぶらりと云ふものは無きかと言はるれば、此人手を打て感じけるとなり。

○催促の小糠

江州に竹林寺と云ふ寺あり、此住持生れつき脊低くして三尺ばかりなりけるが、さる方にて思ひ入たる美少年ありしを密に語らひ、折々寺へ呼び寄せ懇ろせられしが、何とかして打絶え、久しく來らざ

れば、此住持大に氣を腐らかし、何事も打捨て、寢室に打臥しけるに、下人少しの無調法ありしを、腹立ち紛れに枕を投打して散々に悪口しける所へ、一休固より竹林寺は親しければ、圖らず來られて此体を見て、是れは何事を言ひて立腹し給ふぞ、先々堪忍めされよ、何とばし致されしやと訊されければ、住持ひそかに語りて、斯様斯様の仔細あつて、此頃は打絶え參らず、何卒して呼び度候が。親兄弟の前を忍ぶよし承るが、何ぞ其れとなき託けして、打絶え來らざるは如何なる事ぞと問ひやり度候、御坊には才覺人あれば、よろしく頼むと云ふに、一休打笑ひ、それは何より易き事あり、此ごろ澤山に有る菜と飯と小糠とを、少しづつ紙に包みて興り給へ、竹林寺は聞きて、それは如何ある事ぞ、一休申さるゝは、何故にこのか

といふ事なり、竹林寺聞きて、一段面白く候、さらば明日は是れを持たせやるべし、今日は雨中にて猶更心さびし、幸ひ坂本より珍酒を貰ひたり、一つ飲られよ、我も飲へ申さんとて、互ひに献つ酬れつ酒宴なかばに、一休立つて踊られけるが、唱歌に、
君が來ぬとて枕が知るか、枕な投げぞ答は無し、ちくりんくちんちくりんさな、竹林ぢやほごに、さのそんよな、踊はなんよさで、ちやせんやころさ、
と唄ひ奏でし歸られけり、たかしかりし事どもなり。

○狂歌の訴狀

江州の鳥山村といふ所に、六條某殿の御領分ありけるが、久瀬又右衛門と云へる家老、どう欲心の者なるが故、百姓をひたものせぶり

取り、剩へ農具までも取つくすにより、百姓は自ら耕作もならず、在所に住まれずして、一人づゝ行方知れず去るほどに、やうく残る百姓終になり、何れも是れを歎き、いかせんと言ひあへり、其中に一人申すやうは、いかに百姓あればとて、是れは餘り無道なる仕やうかな、耕作の道具までも取られては、何を以て作りをせん、然れば仕所に在りても詮なし、とても死する命あれば、此事を先づ訴へて、其後は兎も角もあらんと思ふは如何にと申しける、此議尤と皆々同意し、さて訴訟を認むるに及んで、誰かれと云ふと雖も、皆一文不知の者共にて、誰か書かんと言ふ者も無し、折ふし一休鉢に行き給ふを、幸の事ありとて皆々立寄りて、訴訟を書て給はれと云ふに、一休聞き給ひて、何事の訴へにやと問ひ給へば、云

々の事と、其よしを語る、に一休聞きて、いや〜是れは訴状まへには及ぶまじ、是を持ちて六條殿へ捧げよとて、歌を書きて與り給ふ。

又もまたとりてもさかぬ一材の

農具のこらすくせやとり山

とよみて、是れを與ばされければ、百姓ども斯る事にては、なかなか取上げ候事思ひもよらずと申しければ、一休いや〜是れにてよし、是非これを携げよと仰せられて歸り給へば、いづれも如何あらんと思へども、皆士百姓の、あか〜り共の密合あれば、論ずれども珍らしき分別も出でされば、是非なくして彼の歌を差上げければ、六條殿御覽ありて、珍らしき訴訟かな、百姓の分として、斯かゝる

事は思ひもよらず、定めて人だのみにて問さつらん、有のまゝに申すべし、若し陳じなば曲事なりと仰せらるゝ、依て一休を頼みし事を申し、これにて事足ると一休の申せし趣をも申上げれば、さればこそ其戯け僧あらでは斯る事言はんもの有りとも覺えずと興じさせ給ひて、其後は農具をも返して、百姓に仁け深かりしとぞ。

○疝氣入浴

一休和尚疝氣にて腰を痛め、伸屈み自由ならず、迷惑したまひ、いろく養生し給へども、痛み止みがたし、さる人來りて申すやう、其疝氣には鹽風呂が何よりも宜しく候、其痛む所を幾度も拭きつれば柔らぎて、即時に治し申候、私も此頃疝氣さし起りしを、風呂にて拭き候へば、其まゝ柔らぎ、翌る日はゆるくと、起居も自由

にいたし候間、御内の太郎次郎御従れなされ、彼れに其痛む所を能く拭かせ給へと教ゆるに、さらばとて、やがて鹽風呂へ入り給ふ、太郎次郎も共に入りけり、さて彼の痛む所を拭けよとて拭かせらるゝに、二人の者やがて拭きに掛かりける、其拭きやうに、畜生くと云ひて、競ひかゝつて拭くほどに、一休つくくと聞き給ひて、何とか合点し給ひしやらん、其返答に、不奉公くと答へ給ふ、太郎次郎も不審に思ひけれども、主人の事あれば、いかゞと問ふこともあらずして打過ぎぬ、或人湯より上り、片隅に居てつくくと聞きて、腹すぢを緩れり、此人わざと黙り居て、翌る日、和尚の許へ行き、申しけるは、和尚様昨夜風呂へ太郎次郎を従れさせられ、御入あされ候や、されば此中は、疝氣にて迷惑いたし居る所へ、或る

人の教にて、風呂へ行きて其痛む所を、能く拭かせよと有る故、夜前湯へ参り候、其方は何として知り候ぞ、いや、さる人の話にて、昨夜承り候、世には風呂にて拭く者も多く、拭かるゝ者も多きが、畜生畜生と言ふと拭けは、拭かるゝ者は不奉公と答へ給ふは、扱々珍らしき拭きやう拭かれやうと風聞いたし候、さやうに拭き又答へ給ふは、いかある事にて候ぞと申しければ、一休それは太郎次郎が畜生と曰ふは合点参らず、拙僧は固より畜生にても無し、又畜生か言はるゝ覺になし、併し畜生の所爲が若し有らば、彼等が奉公の仕様が悪しき故ならん、然るに依つて、不奉公と答へたるありと曰へば此人躍り上り、手を打て感じけるとあり。

○俵入れの水葬

江州の堅田の浦に、彌五郎といふ船頭一人ありける、巳が葉ながら、賤しき營みに簗れはて、一生蒲穂の襖、枕の枕を峙て、眞の道に疎くして、心ざし宛がら夷の如く、九重の花に遊ぶ輩には遙か劣り、自ら賤きに慣れて、美じかるべき事を察知らず、頑に尊き教を弾くこと止まざれば、いと淺ましき便なりけるが、遂に身まかりて死にける、妻子慕ひ歎くこと限りなく、さて有べきにあらざれば、火にや焼かん、土にや埋まんと悲みけるせめては、如何なる智識をも頼みて、後世の苦患を助けたきと思ふ折柄、一休風雲の行術を思しめして、浦の方にねまり居て、四方の致景を築みてはする所に、妻子これを見て、衣の裾にすがり、只今斯様の淺ましきものゝ相衆候が、あばれ御慈悲を垂れて、彼の者の後の世の苦みを救ひ、淨

士に導き給はれかし、生々の厚恩にて候べしと悲みける、一休ふびんに思召し、何より易き事なり、引導さづけ得させんとて、此家に来り給ひ、其志し給ふ様こそ不審あれ、先々死人を米薦に包めよとて、俵に入れて繩をかけ丸太舟にかき載せ、湖水の波に浮べける、沖に至りて聲を揚げ、高らかに曰ふやう、

此俵は是れ元來米俵にもあらず、豆俵にもあらず、

汝は堅田の彌五郎俵あり、江河に沈んで鱗の餌となり、

佛果を得よ、喝。

と曰ひ、水の底にぞ突き入れける、是れ成佛の引導なり。

○一休蟪川初問答

蟪川新右衛門尉親當禪法執心にて心を惱ましけるに、一休の發明な

ることを聞及びて、導師とたのみ奉るべしとて、或時一休の草庵へたづね行き、柴の扉をほとくと打くに、和尚出給ひて、いかなる人ぞと問ひ給へば、いや苦うも候はず、佛法修行の大俗まわりて候と申されければ、一休早や問ひ給わく、

あんちはいづくの人ぞ 答へて曰く和尚と同國

國には何事も侍らぬか 鳥はかあゝ雀はちうゝ

こゝはいづくとか知るや むらさきに染めたる野邊

いかんとしてか染けるや 尾花朝がほ紅菊紫蘭

ちりての後はいかん 宮城野がはら

原に何事か侍る 水ば流れて沈々風は吹て颯々

よき哉、これへくと請じ、國を參らせよとて、

かにながなまらせたくと思へども

達磨宗には一物も無し

返歌

一物も無さを賜はる心こそ

本来空の妙味なりけり

と申されければ、一休曰ひけるは、聞及ぶしよりは、蟪蛄のには
道心者なりとて感じられける、さて四方八面の話過ぎて、親嘗申さ
れけるは、少し承りたき事あり、邪正一如といふ心得は、いかある
がよく侍るや、一休問給へとて、邪正一如の意を、
生れては死ぬるなりけりたしなべて

釋迦も達磨もねこも杓子も

又問ふ空即是色とは如何、答へて

しら露のたのが姿は其まゝに

紅葉に置けばくれなるの玉

又問ふ色即是空の意は

花を見よ色香も共に散はて

心なくても春は來りけり

又問ふ世法は如何に、

世の中ぞくふてはこして寝てたきて

扱其後は死ぬるばかりよ

又問ふ佛法とはいかなる心得をよしとし侍らんや

佛法は鍋のさかやき石の聲

繪に書く竹のともすれの聲

と、一々問ふ言葉の下に歌よみて答へられければ、親指舌をふるはして、聞及びしよりたけき活僧かなと頼もしく思ひければ、いよいよ道を示し給はれ、いつまで語るも濱の真砂のかづくゝあれば、先御いとま申すとて、しをり垣の邊まで歸りけるが、手を礎と打ち立ち歸りて、一大事の安心忘れたり、佛にはいかゞして成けるぞと申しければ、一休彼奴は癖者かあとと思しめし、それいと、易き事なりとて、ふん反り返つて、目口を廣げて、斯くして佛にはなるよと曰へば、親當たごろき、活大禪師かなと、心空及篤してぞ歸りける。

○武士への引導殉死止の歌

讃岐の國に神原兵内と云ふ武士あり、久しく煩ひて醫師は其術を盡

せども、更に其しるし無し、殊に重き病あれば最期は近づきぬ、折ふし一休和尚郷内にましますよし其隠れなく、内々殊勝ある御坊のよしを聞及ばれ、急ぎ使を以て、此度臨終の一大事を聞かせ給ひて、直ぐある道へ引入れ給は、有がたかるべしと申し、つかはしける、一休聞しめして、それこそ易き事あれとて、其まゝ使と連れて参らるゝ、和尚は取つくらふ事も無く破衣に、破紙子の所々糊はあれさながら齋の身ふるひしたる風情も、こゝよりまだ優ならんと思へる風体にて、病人の間近く寄り給ふ、家内の人ども、日頃聞及びし僧あれば、何さま成佛安心至極の旨を聞くべしと、我もく次の間に詰めかけ、頭を傾け耳を澄まして聞く所に、一休何となく病人の耳に口を當てゝ、大音に曰ふは、

汝すでに末期や、我も行き、人も行く、只是れ一生は如夢如幻

斯く曰ひすて、歸り給ふ、何れも勝手には一門家臣集まり、さても
く珍らしからぬ一休坊主の勸めかな、夫れ臨終を勸むると云ふこ
とは、成佛かんじんを言ひ聞かせて心やすくたはするをこそ臨終の
一大事を勸むると云ふものなるに、斯る語は坊主の言ふまでも無く
、皆眼前に人毎に言ふ事あり、さても一狂の坊主かあと口々に申し
あへり、かゝる處へ或る出家來り、此よしを聞き、いや／＼それは
、何れもの不台点なり、一休ほどこそ候へ、斯様の語こそいかにも
殊勝に覺た候、總じて禪宗悟道の坊主など云ふものは、餘宗あご
の様に、或は念佛題目を唱へ、尊き處へ御參り、やれ有がたき事
のたはするなど云ふ事は、禪僧などは申さぬなり、いかにも／＼

右の勸め、殊勝やと申しければ、いづれも始めて然もこそと會得あ
し、皆一同に感じける、さて御内に深く恩を蒙りたる者ども、御最
期の殉死の面々、誰々あるぞと、其用意とり／＼にひしめきけるを
、一休側かに聞き給ひて、其夜門前に一首の狂歌を建てられける、
世の中に生死の道につれは無し

たゞさびしくも獨死獨來

明れば御内の者これを見付けて、早速老士へ持ち出で、何れも打よ
り、如何ある者の建てしからんと詮議しける折柄、又彼の僧申さる
は、此作者別人からず、一休禪師に必定せり、げに尤の狂歌かあ
、此歌は皆人は獨り來て、獨り死する身なれば、たとひ誰彼れ冥途
の供をすればとて、便には爲るべけんや、五十人百人殉死するとも

、自業自得過おれば、各自の罪障により、百人が百所へ分れ行きて主人に附従ひ行く者にあらず、さればあたら若者共を、殉死おさせんを歎きて、此歌を建てられたるならん、今殉死せん命を以て、世嗣の君を守護おし給はんこそ、御家長久ならんと、理を盡して申されければ、皆此理に同じつゝ、重ねて殉死の沙汰は無かりけり、されば死するに定まりたる面々は、一休を活佛と尊みしは、理りせめて道理あり。

○猿の恩禮

一休和尚伊豆の國に在せし時、山人猿一頭を捕へ、柱に縛り付け、情け無くも打擲き、すでに打殺さんとする處へ、和尚行き合せて不憫に思ひ、請ひ取りて放ちやり給ふ、折しも夏の項ありしが、或日

の夕暮に其猿、苒を落の葉に包みて持來り、一休へ差出しける、一休可愛く思めし、布袋に豆を入れて取りければ、取りて歸り、重ねて其袋に栗を入れて來り、和尚に差出して歸りけるとなり、黙類といへども命を助けられし、恩の程を能く知れり、然れば人間の身として是非の別ちを知らぬは、猿にも劣れりと感じ給ひ、此事を檀徒方にて語り給ふ、此ことは少しも詐りの無きことあり。

○別法山心外寺の問答

一休和尚關東の心外寺に暫く在せしが、此住持も前年同學したる間柄ありしかば、昔の好みを思ひ、種々馳走し給ふ、或時一休徒然の餘り客殿に出で、四方を眺めて在する折柄、土地士と思しき人、供人四五人連れ來りて、一休に向ひ、如何に御坊、此寺の寺號山號は

何と申すぞ、一休答へて、山號は別法山、寺號は心外寺と申す、貴殿は如何ある御方にてましますぞ、某は矢奈木雪折と申して、此邊近き在所ものあり、此寺はかねて承り及びしまゝに參詣いたせり、さても珍らしき寺號山號なるかな、夫れ三界唯一心外無別法にして、心の外に法無し、如何なるをか是れ別法心外寺ぞと尋ぬるに、一休取敢へず答へて曰く、夫れ柳の枝に雪折なし、如何なるか雪折ぞと答へ給へば、此士大きに感じて、さてもく、答話かしこき坊主かな、我等は内々巧みてさへ、差當れば失念する事あり、又は曾て出でざる事多し、即時に斯様の返答せられし事、適れの御坊かなとぞ感じける。

○殺生者の改心

一休御雲水のころ、駿河國富士郡の、大石寺に知音の僧在すと尋ね給ふに、互ひに懐かしう思しめし、暫く足を止め給へとて、滞留ありしより、近村の凡俗を集め、寺僧の法談などし給ふを助講せられし折から、隣村に村山といふに、喜兵衛とて大農家あり、常に暇ある身あれば、殺生のみを樂みとせしが、庭先の柿の樹に鳩二羽來り止まりしを、得たりと鐵砲取り出し、忽ち一羽を撃落せしに、一羽の鳩、驚きて飛去りしが、又元の枝へ來りて止りしを、又も、丸を込めかへ、同じく撃落せしが、偶と一休和尚の法談を思ひ出して、鳩に三枝の禮ありと聞きしが、正しく此鳩は、雌雄の鳩にして、雌を先に打ちしや、雄を先に取りしや、残りの鳥の元の枝へ來りしは、死を共にせんとして、我が丸先を待ちしこと疑ひ無し、さて

く鳥だにも夫婦の約あるものを、稀に人間と生れながら、殺生を好み、是まで數多物の命を取るを樂みと心得し業因の程こそ畏ろしやと、忽ち發心して、一休の許へ走り行き、若きときよりの我が誤りを懺悔して、御剃刀を授けさせ給へとて、其坐にて剃髮染衣の身となり、全證法號を受け、明壽念佛三昧に入り、八十有餘の年齢を有ち、子孫榮えけるとあり、一休より名を下さるゝとて、

心より首に掛けたる傀儡師

鬼を出さうと佛出さうと

○馬乗の歌

越前の付中に、長野銀助とて乗馬の名人あり、一休和尚福井より上り、此府中に二三日滯留して萬を執行ひ給ふに、彼の銀助聞及び、

御齋を上げ申したしとて、和尚を迎へ、御齋も過ぎて、四方八面の物語の頃、さる方より跳馬を曳て來り、御難かしながら此馬を只今一馬場せめて給はれと申すに、易き事ありとて、やがて馬引よせ乘られしが、此銀助と申すは、元來疝氣の病にて、陰囊大きに腫たりけるが、鞍の前輪に支へて、殊の外乗にくき様子と、一休見て、にかしく思ひ、

はね馬の前輪にかゝる大ぶくり

陰囊ぶくりんと是をいふらん

と、よませられければ、銀助大に興じけるとなり。

○和尚の迷惑

一休和尚北國より京都へ上り給ふとき、越前敦賀の宿を打過ぎ、海

津の山中に一宿し給ふが、何者か言ひけん、今宵此宿に泊りしは、都に名高き舞ひの大かしらにて、今は入道して世を捨て、諸國を修行し給ふと承る、いざしく方々皆参りて、一ふし所望せんは如何皆々是は一段の事かなとて、多人數旅宿へ詰かけて、一休に對面し、御坊は承り候へば、都かたにて舞まひの大かしら殿のよし、遠國遠里までも其沙汰かくれおし、幸ひ是れに一宿し給ふこそ、後の語り句に爲し申さん、一ふし舞ふて見せ給ひ候へと、責かけて申しければ、一休は大きに迷惑し、これは思ひもよらぬ仰せかゝ、見給ふごとき坊主なれば、經陀羅尼などは少し存じたるが、其舞といふものは更に知らずと、斷られければ、在所の者ども、いやしく何と曰

ふとも只一ふしの所望に候、せひく御舞あさならば、今宵の御宿は叶ふまじ、いかにく、と責かけて所望す、一休さてくそれは迷惑千萬、定めて人ちがひなるべしと、さまざま詫たまへども、皆文盲ある里人あれば、更に合点せず、是非共くと所望すれば、暫し案じて、愚僧決して其演舞者にては無く候へども、一ふし舞はざれば御歸りあくば詮方なし、愚僧若きときに、高館といふ舞を少し見覺わたるが覺束あく候へども、一ふし舞ふて見申さん、先づ鈴木三郎が紀州藤白より、奥州衣川まで着きし所を、少し舞ひ申すべしといふに、在所もの、高館が何やらん知らされども、早くくと言ひけるに、一休坐を更め、扇を丁と打ちて、

さる程に、鈴木三郎重家は、旅の装束めされつゝ、藤白を立

出て、奥州さして下られける程に、下られける程に、く、

と、凡そ二三十へん下られける程にとばかり、繰返し〜申されければ、里人等是不審して、いかに御坊、先程より同じ事を、繰返し〜、曰ふは如何の事にや、早や舞を舞ふて見せられ候へ、一休然あらの顔にて、三郎が紀州より奥州まで、七十五日が日數をかゝりて、衣川へ着かれたる事なれば、先づ下られける程にを、三十日も五十日も申しつゞけにして、それから衣川に着しての舞を舞ひて見せ申すべし、各々にも此家に八九十日滞留して、衣川の處を見給ふべしと日ひければ、何れも顔を見合せ、大きに悔れ暫くの間さへ、下られける程にて、退屈し侍るに、争でが七十五日が間、聞くこと

はなるまじとて、皆々家にぞ歸りたるとなり、是れも一時の頓才ありと人申しあへり。

○無沙汰見舞の返歌

今用川通に、よしや如齊といふ者あり、かねて和尚と交り厚かりしが、打つゞき用事しげくて、久しく和尚の許を尋ねざりしかば、心にや懸りけん、文を認めて、此頃は用事集ひ候ゆる、御見舞も申上げず、御無沙汰申候、いづれ近々御見舞申上るあど、断りの文を遣はしける、其返事に

見舞とて見まふとくれを見まはずとよしや如齊と思ふ身ならばと、よみて遣はされける、如齊これを見て、御坊の今に始めの輕き御事かなと感じけるとぞ。

○高野登山

一休和尚高野山へ登り給ふ、四方の山々を眺めて、さても聞きよしより尊きけしき哉と、眺めたはするに、高野の僧侶ども立出で来て一休を見て、如何ある人ぞと尋ねければ、愚僧は名も無き道心者にて侍るが、此山始めて一見仕候へば餘り風景が面白く侍れば、腰折の詩か歌か、一首仕らんと存じ、つくとして侍ると曰へば、僧侶ども一休とは中々思ひがけねば、しほらしき事を言ふ御坊か、諺に曰へる盲者の垣のぞき、兎口の嘘にて心感むるとや、其身は屈みてこそとて、うそ寒げある形容にて襟は此山の名産、高野剃刀の刀よりも薄き襟付にて、細首のいと危険き体にて、詩歌を案ずるとは出来たりと、口々に舉しめ笑ひけるに、一休耳にも掛けず、空うそ吹

きてたはしけるが、一漸う一首仕たり、硯と紙と賜はれと申されければ、何、一首出来たりとや、さらば拜吟仕るべしと打笑ひ、硯紙を出しければ、一休筆を執り、彼の淡土の東坡居士が經山寺の詩を、山形に作りしを例として、筆のあと麗はしく、さも見事に書れた



山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
秋	春	迎	高	高	開	近	近	表	表
葉	開	連	都	都	華	都	都	華	華
落	花	峰	卒	卒	藏	卒	卒	藏	藏
	發	報	內	內	世	內	內	界	界
	空	佛	院	院	地	院	院	一	一
	一	心	土	土	佛	土	土	一	一
	空	亦	進	進	惱	進	進	一	一
	落	寂	空	空	亦	寂	寂	一	一
					寂				

此山形の詩の讀方は、

山高近都卒内院
 山迎連峰報佛士

山閑表華藏世界
 山平幽臨化佛地

山春開花發心進

山夏涼風煩惱醒

山秋葉落空亦空

山冬素雪寂亦寂

斯の如く、即時に筆をとりて、さら／＼認め給へば、一山の僧侶大に愕き、さても形容には似合はざる見事なる筆跡と云ひ又目なれぬ詩の体かなど、開きたる口を塞ぎかね、扱々先刻は皆々よしあき事どもを言ひて、御僧を辱しめ候事、返す／＼も恥かしうこそ、如何なる人ぞ、御名を名のり給へと、口々に申しければ、其時の下に候と曰へば、まことに小文字に候が、何一とか申すぞと尋ねける、其中に一人の僧侶眉を蹙め、此詩の筆跡を能々見ると、京都紫野なる一休和尚の書なり、然るからに一と書されたり、さればこそ曲者ありと、ふり返り見るに、和尚は彼方へ下向し給ふ、僧侶たち、

それ止めまゐらせて、過言を謝罪れとて、走り付きて引どめ、一
 休和尚とも存せずして、段々無禮を申したり、御免ありて先々坊中
 へ入らせ給へと、慇懃に述ぶるに、一休いや／＼何も斷り給ふべき
 事には、さら／＼無しとて、機嫌よく坊へ歸り給へば、僧侶たち種
 々馳走を參らせける、さて厚く禮を述べ、下向し給ひけと跡にて、
 一人の僧侶申すやう、斯る名僧また登山し給ふこと稀なり、願はく
 ば、大師の御影に贊を頼み申したらば如何にと言ふに、何れも道理
 と同じ、さらば今一たび呼返しまいらせんと、又、追かけ奉るに
 、一休は何事にやと仰せらるれば云々のよし申すに、一休笑ひ給ひ
 て、夫ほどの事又立歸らすともなる事あり、御影を急ぎ持來られよ
 とて、道なる茶屋に休らひてたはしける、人々驚き、大師の贊を請

ふに、立ながら思案も無く爲さるゝ事聞さしより大博學の祖師かな
 と、舌の根をふるひけり、扱大師の御影を持歸りければ、
 弘法大師活佛死ねば野原の土とある
 と、一筆にさら／＼と認め給ひて下向し給ふ、人々深き事もありと
 急ぎ登山して、學匠に見せければ、格別の戯け事ありしかば、又僧
 侶ども口を得ふさがざりけるとあり。

○松の曲直

一休和尚能州蜷川村の草庵にましませし頃、泉水の岸に、水の上へ
 及んで横ばひにひ、ねたる松のありける、弟子衆を集めて、此松を
 眞直に見たる者やあると尋ね給ふ、皆々立かはり入かはり見られけ
 れども、横ばひの松なり、其時蜷川新右衛門參り合せて、我等いか

にも真直に見て候と申されければ、さては如何にと仰せあれば、真に曲みてこそ候へと申されければ、和尚手を打ちて、能く見られたりとて、五十則をゆるすと仰せられける。

○熊野山の詩歌

一休和尚熊野山へ参詣せられて本宮へ上り給ふ、頃しも春の半おれば、山々谷々の櫻、都三月の頃よりもいと目出たかりければ、拜殿に打上り、四方の風色を眺めまします處へ、社僧一人まかり出で、客僧はたゞ人とは見参らさずと申しければ、あかく我等は常人にては候はず、御覽候へ出家にて候と申されければ、彼の僧は臆を潰し、是は興がる御僧かなと、一つ二つと物語し給ひて、和尚此僧は少し話せると、思し召し、高野山の詩の事を思し出され、此山にて

も一首を作りて慰まんど、矢立を取出だし、さらりと書きて彼の僧に見せ給へば、其儘神前へ供へて、さてく御筆跡見事に候、都人と見申すは僻目かと申しければ、和尚答へて、能くこそ察せられたれ、我は都紫野の一休と云ふものなりと仰せられければ、さては豫て聞傳へし和尚にてましますかなとて、彼の神前に捧げ置きしを取來りて、逆もの事に御名を書付給へと願ふに、さらば後の代語り艸ともなりなんと、一休老人偶題とぞ記し給ふ、其詩は、

- 山廟等一扶桑神。 山客成群數万人。
- 山海浪高船片々。 山樓鐘動月輪々。
- 山龍吟落碧雲漲。 山谷洗流頰惱盛。
- 山里放光三社景。 山花猶馥本宮春。

この意義、それを斯く、

山	客	成	群	敷	萬	人	々	塵	春	山	廟	等	一	扶	柔	神	々	漲	景	山	龍	吟	落	碧	三	山	里	放	光	
山	樓	鐘	動	月	輪	一	惱	宮	一	山	海	浪	高	船	片	雲	一	社	一	山	龍	吟	落	碧	三	山	里	放	光	
山	谷	洗	流	煩	一	本	一	山	花	猶	一	馥																		

一休老人 偶題

遊ばされたり、されば彼の僧は、一休和尚なりと、自宅へ招じ、横
 槌にて庭を掃き杓子にて芋を摺り、御馳走申すこと恐かならず、折
 しも花の盛りなりければ、庭前の花をも見たまへとて、酒肴を出し
 て慰め申し、さて彼の僧申しけるは、此山へ又御越なさるゝ事も計
 りがたし、末代の實とも爲すべければ、何にても一筆あそばし給は
 れと申しければ、易き事あり、御望あれと曰へば、さても拜殿にて
 の御作の死体は、古よりも斯る体の侍りけるかと問ふに、いかに
 も古より有りし事あり、漢土の東坡居士が經山寺にて作りし、体
 なりと語り給へば、さてく珍らしき詩や、されど斯る山奥に住み
 て殊に學問も無き文盲の我々が、目なれ耳かれす候、相成べくは恐
 ある我々が、耳なれ目なれたる事を願ふありと申上げれば、和尚打

うさづき給ふ折から、春風吹きて、櫻のばら〜と散りければ、貫
之の歌を思し出されて、

櫻ちる木の下風は寒からで

空に知られぬ雪ぞふりける

これに如何にと曰へば、彼の僧、いや是れも、未だ耳あれ申さる
處なりと云ふ、又櫻の花の風に散らされ、さつ〜と亂れければ、
其まゝ、

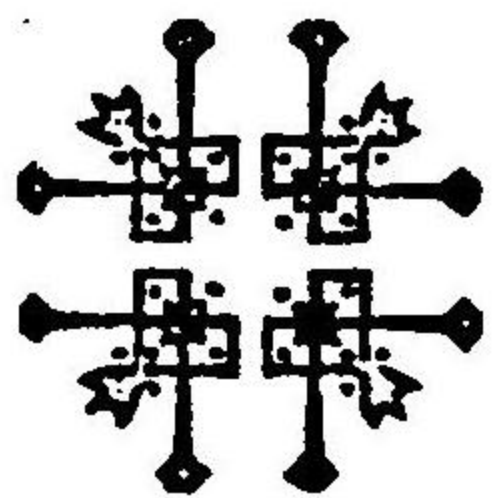
雪やこんこ散やこんこ御寺のかきの木に一杯降積もれこんこ
是れは如何にと申されければ、彼の僧大に打笑ひ、扱も戯けたる御
僧かな、如何に耳あれ目なれしものごとも、其れは餘りにと申せば
一休も笑ひ給ひて、實道理なり、いで〜其望みの目にも耳にも慣

れし事を書きて参らせんとて、

さねが鈴海山樵夫谷の聲入相の鐘に庭前の花

と遊ばしければ、彼の僧、さてもよき御輕口や、實に見あれ聞なれ
しものを望みけるこそ恐あれとて、御口の輕さを感じ侍る、斯くて
種々馳走申しければ、序あれば彼の東坡が詩を書置くべしとて、

(左記)



山僧

山鳥菓來

山雲飛片偷問

山花發茂林々食道

山遠路幽深沈吟尋

山水碧沈抱相

山猿樹還

山客

此詩の讀方は、

山花發茂林。山遠路幽深。山雲飛片々。

山水碧沈々。山鳥菓偷食。山猿樹抱吟。

山僧來問道。山客還相尋。

斯く書與へて、暇申してぞ歸り給へりとあり。

○河豚往生の引導

泉州の堺に、一休和尚へ常に参りて、御心やすく御意を得たる又次郎といふ町人ありける、或時河豚汁をしたゝか食ひてけるが、殊の外に酔ひ、終に其日のうちに死しけるが、臨終の時に、申しけるは、我れ世に在りし時、死ぬる事は何時の頃ぞやと思ひけるあれば、後世とて願ひ置きし事も無し、されども一休和尚へ常に伺候申し、御物語ども承りし結縁あれば、引導をも頼み奉れ、斯る不慮の死を爲しけり、さこそ哀れとも思召すらめ、必ずと言ひ置きて、終に左しくなりにける、妻子眷屬歎き悲み、遺言の通り具さに一休和尚

へ申上げれば、いと易き事なり、扱々ふびんの仕合と仰せられける、然る處へ、早や時分もよく候間、和尚様御出を仰ぎ奉るご、再三人を遣しければ、一休仰せられけるは、いやく、我等罷出づるに及ばず、引導具さに書きて遣すべし、誰にても讀上げて葬れよと仰せられければ、妻子は歎きて、遺言にて候間、平に御出下されよ、御慈悲ありと種々願ひければ、一休曰ひけるは、いやく、我等が出れば反つて彼れが迷ひとあるあり、即ち書て遣はすべしとて、海中有毒魚。名曰河豚魚。而腹白背斑。人不食此魚。嗚呼痛哉又次郎食之忽死來。彼歳五十四。彼歳五十四。合せて球數一連百八煩惱のさづきを、ふつと斷て、行きたい

方へ、つゝと行け。

木曾十七寅の年、角のあいこそ添よけれ。

と遊ばして遣はされけるとかや、然れば各々肝を消しけれども、仰せなれば其如くに行ひけるが、其引導の書きたるを、其子供秘藏して今に傳へ、其家の實とし、又も無き墨跡にて代々所持仕りて有りけるとなり。

○蜷川の風雨見舞

頃しも八月下旬あれば、大風大雨類りにして、浴中の家居社殿堂塔も損じければ、蜷川新右衛門取る物も取敢へず一休和尚へ御見舞申して御坊御内に御坐るか、何とく殊の外ある大風大雨、御寺は何處も損じ申さず候やと申しければ、一休出合ひ給ひて、能

くこそ御心付き候ものかな、誠に珍らしき大風にて候、さ
ら、當寺は何事も候はずとて、

我宿は柱も立てず葺きもせず雨にも濡れず風も當らず

と仰せられければ、其御庵は何處のほどにて候ぞと申しければ、

一休笑はせ給ひて、さればこそ大事のことを御たづねあれとて、

我庵は都のたつみしかぞすむよをうち山と人はいふあり

と仰せられければ、さては喜撰法師と相住おされ候かと戯れけれ

ば、いや喜撰法師に借りて居るありとありければ、さては借家ご

のにて候かと申して笑はれしかば、一休また一首をよみ給ふ

かりの世にかしたる主も借主も貸すと思はず借ると思はず

とよみ給へば、新右衛門此歌を感じて扇子に書き留め、假初に参

りても得道の徳侍るとて悦びて歸りけるが、門より立ちりてよとて
、くたかしき戯れごとと仰せられしに、伺ひ申すへさと思ふこと
を打忘れ、斯く既に歸らんと仕候、此心はいかに心得申すへさ
とて、

吹くときは物さわがしき風あるが吹かぬときは何地なるら

ん

と申ければ、其まゝ御返歌ありける、

吹くときははうへ騒がしき山風も吹かぬときは吹かぬありけ

り
と仰せられければ、新右衛門ものをも言はず願きて暫く禱拜

して歸りしとなり。

○西國諸侯へ引導

西國の大各身まかりける、臨終のときに申されけるは、我れ死して後、種々の佛事を勤むべからず、紫野の二休禪師を請じて、引導を頼み申せ、是より外に望み無しとて死したりける、人々歎き御遺言なればとて急ぎ都へ使者を立て一休を請じける、一休折ふし在庵にて、易きことなりとて、彼の使者と共に打連れて下り給ふ、既に葬送の日限極まりしかば、音に聞えし紫野の二休こそ、此國の某どのの御引導の爲とて、御下向ありしとて、國々島々より聞くほどの人、足を空にして貴賤群集し、御引導を聴聞せんとを願ひける、葬禮の儀式、天には花を降らし、地には錦を散らし、其装ひ詞に述べ難く、其日になれば數萬の見物、彼の二休の

引導を聞きたしと、押し合ひへし合ひける、さて玉の輿を昇き据ゆれば、一休立出で給ひ、棺の前に一黙し給ふ、諸人すはや、今や今やと耳そばだてゐるに、一言をも言ひ給はず、天を仰ぎて口を潤と開き、地を見て口を寒きて、其まゝ、すつと退き給ふ彼の、大名の御簾中、公達を始め、一門家來の輩まで、是れは如何ある御事やらん、せめては一句を示し給はれと。御衣の袖にすがりつゝ、諸人の見物も興をさましければ、一首の歌をよみ置き、都をさして上り給ふ、人々是非なく其歌を見れば、

我はたゞ後世の教へを知らぬあり開閉の二字のあるに任せてとありければ、皆人これを聞きて、開とも閉とも言はれざる御僧かあと、黙して感じあへりしなり。

○行くらへ

一休堺へ御下向のとき、淀の川瀬舟に乗り給ひけるに、乗合に山伏
 ありける、御坊は何宗ぞと問ふ、一休我は釋宗ありと答へられけれ
 ば、釋宗には我等が如き奇特はあらじと言ひける、一休申さるゝは
 如何にも奇特多し、其方に何にても奇特あらば見せ給へと仰せられ
 ければ、いで我等が法力にて此船の艦に不動を祈り出して御目にか
 けんとして、一に金剛、二にせいたかを始めて、揉みに揉んで祈りけ
 れば、皆々乗合のものごも目と目を見合せ居るところに、案の如く舟
 の艦に忽ち不動の像火焔を放つて顯れたり、其時山伏ぢうめんを作
 り、各々拜み給ふかと申しければ、皆人不思議の思ひを爲けれども
 、一休は更に不思議にもましますぬふりなり、いかに禪僧斯る奇蹟

は如何にし給はんと、せぐりかけて申しければ、我等が奇特には、
 身より水を出して、彼の火焔を放つ不動尊を消して見せん、随分祈
 り給へとて、彼の不動の像の火焔に小便を、したゝか仕かけ給へば
 、火焔は其まゝ消えて、山伏の法力盡きけり、皆人一休を拜禮して
 奇異の思ひを爲しけるなり、さて船より上りて、陸路を打連れ行く
 處に、向ふより大きな犬の、山川にも響くばかりに吠わてかゝり
 ければ、山伏申すやう、いかに御坊、先きの行くらべにこそ負けた
 りとも、彼の恐ろしき犬の怒りを止め、只今これへ呼び寄する法力
 を顯さんが、御僧は如何にと申しける、一休是れはいと易きことな
 り、先づ祈りて見給へと曰へば、山伏大いらたかの赤木の球敷を、
 さらりと、押もんで、祈りこそ祈けるが、一切犬は吠え止まず

・手元に来る念も無かりければ、堅さまや横さまかけて十文字、犬の喉止めよ、あびらうんけんそわか、くといへども、犬は吠止まず、一休たかしく思し召し、其處退き給へ某は、それ程の事に、あびらうんけんも、そわかも要る事にあらず、彼の犬の怒りを止め、忽ち此處へ來らせんと、懷ろより晝飯の焼飯を取り出し、彼の犬に一目見せて、ころく、ころくと曰へば、さしも怒れる犬おれども、焼飯一目見て、くんくくとて、尾を揺り來りければ、山伏も膽を消し、皆人さても格別なる心得かなと、感せぬものこそ無かりけれ

○新村酬恩庵の再興

一休和尚いまだ若くましませしとき、山城御見物の爲め大徳寺を立

出たまひ、南山城の薪といへる處に至り給ひしに、古き寺一ヶ寺あり、寺號を酬恩庵と申しぬ、されども此寺久しく絶えて住むべき僧も無ければ、自ら野干の住家と爲りて、古き昔は壁を閉ぢ葺は軒を蔽ひつゝ、物すさまじき有様となれり、土地の者ども集まりて申しけるは、斯まで荒果て候は、唯だ住まんと言へる僧の無き故なり、然るべき僧もあらば招き、此寺へ据ゑ申したしと、彼れや此れやと土地の者の集ひ來り申しければ、和尚つくくくと考へ給ひ、さても風景と云ひ、何といひ、如何にも惜しき寺なり、我に與へなば住たはすべしと曰へば、里人言葉を揃へ、是まで住まんと云へる僧達六七人も種々として据え候へども、或は夜の間死に、又は行術も無くあり、種々の怪しき事ばかり多ければ、いよく里人とても熱だ

に行かふこと無く、荒れ果て候と語りければ、一休具さに聞きて、苦からず、いかにも我れ住たほすべし、興へよとぞ仰せられければ、里人ども口々に、若き御僧のいらざる事と言ひける中にも、いや／＼禪僧は若きとて、年齢によるべき事にはあらずと言へる者もありければ、然らば貴僧に任すべしと、皆々申しければ、其處彼處と御覽あり、如何さま怪物の住むぞと覺ゆるとて、やがて出で給ふ、在所の者ども是れを聞きて、いよいよ是まで怪しきことの次第を、残らず申し上げ、さまざま制しとめ申せども、只我に任せよとのみ仰せ給ひ、唯一人すごとくと、荒はてたる古寺の疑らあるに、其夜幽ある燈灯をのみ便りにて、夜の更け行くを待ち給ふ、既に子の刻ばかりと思しきとき、寺のうち震動して、電少後まじく、雷鳴の

如き音して、年齢のほどは十六歳ばかりの女、いかにも容顏美麗の姿にて、忽然と現れて、一休の御傍近う歩み寄る、其時和尚少しも騒ぎ給はず、大かた心得たるぞ、其處を去れよと曰へば、跡無く消失せぬ、暫くありて同じ年ごろの兒、銚子土器を持ち添へ、夜寒に候、酒をすゝめ奉らんと戯れて、御傍に近う歩み寄る、一休少しも驚き給はず、最前の者よ、又來るか、と曰へば、是れも同じく消失せぬ、免角するうち、程なく既に丑の刻(凡午前二時)とも思き頃、寺内搖ぎ騒ぎ、電光益々凄くて、長一丈許の法師、面は黃疸を病む者の如き顔にて、眼は朱を塗りたるが如く、恐ろしき有様にて、ひらりと飛めぐり、佛壇の下を頻りに睨み眺めたり、一休ごとくと御覽じて、三度まで來ることこそ恐かなれ、早く土底へ歸れよと曰

へば、早くも消失せぬ、程無くほのくとも夜も明ければ、在所の者ども大勢が誘ひ合ひ、彼の寺へ來り、さても如何ある一休とて、定めて變化の者に殺され給はんことの無残さよと、念佛など申して一町ばかりも隔て、慄ひく、和尚は在しまするか、一休坊やわたらせ給ふかと、口々に呼ばれば、其時寺の扉を開き、門の外に出で給ひければ、一度にごつと感じつゝ、暫しは鳴りも鎮まらず、さて和尚様を便りにして、皆々寺へ入りにける、一休曰ひけるは、先づ此寺を崩し、佛壇の下を深さ三尺、幅一間四方を掘りて見よと曰へば、在所の者ども申しけるは、仰せにて候へども此寺は年久しきと承り候、殊に故ある寺のよし申し傳へ候へば、毀ち申さん事いかゞと、言葉を揃へて申しければ、一休聞き給ひ、然ほど惜しく思はゞ

此寺を崩し、其跡に如何なる伽藍をも我れ建立すべしと仰せられければ、さらば仰せに従ひ候はんとして、人々集りて寺を崩し、佛壇の下を掘りて見れば、黄金を詰めたる壺三つまで掘出しける、其黄金を一壺を、地頭に進上し、一つは土地の者共に取らせ給ひ、殘る黄金にて、善儘し美儘したる堂塔を建立し給ひしとなり、其時より酬恩庵を太徳寺の末寺と定め、此寺に一休和尚住ませ給ふ事久しかりける今の世に至るまで、一休和尚の御隠居寺と申し曉せり、然るによつて、御眞跡、靈佛靈寶數多有りける、山城大和奈良までも眼下に見わたし、絶景諸人の目を驚かし好士の者遠きをも厭はず歩み運び、春は花、秋は紅葉、或は松菖狩をぞして群を爲しけるとかや。

○遊女地獄と問答

一休和尚泉州堺の浦に御越ありしとき、其處の旅客を宿する家居のうちに、地獄といへる遊女あり、此者 一休和尚の名高さを知り、一首を詠じ奉る、

山居せば深山の奥に住めよかしこゝは浮世のさかひ近きに

一休其まゝ御返歌

一休が身をば身ほごに思わねば市も山家も同じ住家よ

と返歌し給へども、こいつ常からぬ者と思しめし、遶りの人に如何なる女ぞと尋ね給へば、彼れこそ音に聞るし地獄と申す遊女なるよし申しければ、和尚其まゝ、

聞きしより見て恐ろしき地獄かゝ

と遊ばしければ、遊女とり敢へず、
しにくる人の落ちざるは無し
と、答へけるとなり

○地獄の問答

一休和尚甲斐の國に暫く御逗留のうちに、地獄など云へる高山あり古跡も亦多ければ、一見の爲め立出で給ひけるを、土地の地頭、一休の答話よき事を、聞及びければ、直ちに聞かまほしく、故と僅の供まわりにて、知らぬ体にて近く行きむかひ、其れなる法師よ、地獄極樂は如何にと問ひければ、一休眼に角を立て、糞を喰へと曰へば、地頭以ての外に腹を立て、憎き坊主の悪口かゝ、物な言はせそ縛めよと下知すれば、畏まつて若衆ども、走り寄つてさんざんに

打据え、高手小手に縛めければ、一休、自若として地頭に向ひ、是れこそ地獄よと曰へば、地頭心づき、遊て馬より飛下り、手づから一休の縛めを解きて、さても有難き御教化かなと禮拜し、我が乗りたる馬に一休を乗せ参らせ、私宅へ伴ひ歸り、種々の珍味を具へ朝夕傍を離れず、馳走いたさるれば、一休是れこそ、誠の極樂なりと曰ひけるとかや。

○文字の意味答への御頓才

一休和尚御養生の爲めとて、常に粥を食りける處へ、長谷川與吉とて小ざかしき男参り合せて、御相伴いたし、さてく和尚さまへ、此粥に付て御尋申上げたきは、此粥と申す文字は、両側に弓を書き中に米と云ふ文字を書くには仔細こそ候はめ、我第不審至極に存候

抑粥と申すものは、水の中へ米を入れ、しるく柔かに煮きたるを粥と申すなれば、三水に米とか、或は食偏に湯なごころ書くべきものにて侍るに如何ある仔細にて斯様に、書き申すやらんと尋ねければ、和尚答へて曰はく、此字は仔細こそあれ、昔し淡土に神農伏犠とて聖王たはしけり、其頃迄はいまだ文字定まらず、米食などの文字はあれども、粥と云ふ字かかりしを、伏犠福農其外數多聖賢たちを集めて、米を水の中へ入れ、しるく柔かに煮て用ゐれば、腹中調ひて消れやすきものなれども、此文字未だ定まらず、如何に造るべきやと有りけれども、何れも頭を傾け、さまざまと思案し給へども思ひ出し給はねば、案じ煩ひて、先々粥を煮て人々に差め給ひけり然れども誰あつて思ひ出し給はざれば、神農器物の上に、箸をから

りと置かせ給へば、其箸は煮湯氣に暖められ、反りて弓のやうに見えたり、さてこそ兩側に弓を書きて中に米を書くなりと答へ給ふ、與吉手を拍て申しけるは、適れ御頓作にてまします、いかさま故無き事にては候まじ、何を御尋ね申し上げても埒明け給ふ御事とて町々笑ひひり、されば此たかしきに附けて、又不審こそ候へ、只今の如く笑ふといふ字を、草書にて竹冠に犬と書くこそ心得申さず、笑ふと云ふ文字、口偏に廣がるとか、目偏に鼓など書くべきものにて侍ちめ、竹冠に犬と云ふ字如何なる仔細にて書き申候ぞと尋ねければ、一休聞し召して仰られけるには是、も粥と一度に作られたり、笑と云ふ字を工まんとて、數多聖賢列び居給ふ處へ、小さき犬、頭に籠を被りて戯け狂ひければ、人々一度とぞつと笑ひ給

ふ、其故にこそ右の通に書くなりと曰ひひり、如何さま謂れを承れば面白き御事かゝと感じける、處を和尚見澄ましたりと思しめし、總体文字と云ふものは、一々能く理を責めたるものにて御座る、日用に皆々書かねばならぬ金と云ふ文字は、中にも能く作りたる文字にて、觀音經の中にも、金銀瑠璃瑪瑙など、七つの寶を言ひ並べし第一番に、金銀と言ふてある、其金銀なれども、持つべき人が持たねば寶とはならぬ、依て人と云ふ字の下に主と云ふ字を添えて金と云ふ字に讀ます、何と能うしたるものでは無いかと仰せければ、成程とは云ひながら、此男何が鈍と突きたく思ひて、和尚さま、御尤の仰せながら、草行で書くときは如何にも人の主に候へども、眞字にて書けば並、斯様に書けば主と云ふ字とは少し異ふと存する

が、如何と申しければ、されば、其不審は無くて叶はぬ所、其所が第一の心の着け所よ、一日も無くてはあらぬ大切の金おれども、しんでは身に附かず、要らぬ物よと仰せられければ、扱もく淺はかなる据尋ねを申し上げ、一生の寶を待たる事よと、説びてこそ歸りけれ。

○出合問答

一休和尚常陸國鹿島の宮居一見の爲め參詣し給ひ。己に御社近く歩み給ふに、茂りたる森の樹蔭より、何者とも知れず丈七尺許の山伏つと出來り、和尚に向うて

佛法は如何に

と問ひかければ、

胸に在り

と答へ給ふ、さらば割りて見んとて、氷の如くある刀を扱きて、心もとに差當てける、一休少しも騒ぎ給はず、

春毎にさくや吉野の山櫻木を割りて見よ花の在家を

と、古歌を詠じ給ひければ、山伏は恐るゝけしきにて、何方ともなく消失せぬ、いとも目出たき歌にこそあれ。

○輕口問答

一休和尚甲斐の國へ御下向のとき、土地の菜、かねて和尚の答話よきことを聞及びし故、一休の頓作を目のあたり聞かんと思し召し、使の童に教へ言ひけるには、和尚此處を御通りるとき、生懸磨のとき如何と申せ、和尚何とか言句あらば喝と言ふて立去れよと言ひ合

め教へけれども聞き慣れの言葉あれば、覺え難き顔に見えける故、重ねて言ひ聞かせけるには、生の字は生と云ふ字なるぞ、慥慥は芋を、いんと跳たるものと覺わよと、惡ろに教へ置き、一休の御通りを今や遅しと待ちける所へ、和尚何心なく通り給ふを、彼の童駈け出でよ、

あまいもの時如何

と問ふ、一休取あへず、

煮てもよし、焼てもよし

と仰せければ、童は教へられし如く喝と言ふ、一休答つて、えぐひかと有りければ、某どのもをかしま中に頓作ある事を感じられけるとかや。

○秀句問答

一休和尚比叡山へ登り給ふとき、嵯川新右衛門御供申されける、折柄、彼の山へかよりし頃、新右衛門は、和尚様へ申上げたき句、偶と浮み候間、申して見候はん、御付下されよとて、

ひえの山路をひらひゆくかあ

と、曰ひも果てるに、

さし解けて麓に四貫の錢をばらり

と、附け給ふ、斯くいちはやき御頓作にてぞ有りける、其れより山に登り給ひて、種々の詩歌あり、

一文や二文は何と思ふなよ阿彌陀も錢で光る世の中

嵯川

金持を十人よせて眺むれば中に五人は無學文盲

一休

○赤飯答話

一休和尚親しき在家へ御出ありしとき、折ふし到来せしとて強飯を奉りけるが、亭主は嬉びたる者にて、かねて和尚の答話を試んと思ふ折から、是れ幸ひと出しけるに、遠慮も無く手づから握りては喰ひ、握りては喰ひ、好物の由にてしたゝか召あがられけるを、扱こそ好き折柄とて、和尚さま、せき飯あれば、むごとは胸は通るまじきに、倉忽に食るは如何と曰ふ、一休そらさぬ風情にて、ひたもの食りけるに、亭主頻りに、一句無くして食るは詮なし、如何にくと責めければ、其時和尚答へて、

是れ見られよ、せき飯と聞くからに握り固め、手形を着けて通す程に、いくらにても通るなり、

と仰せければ、亭主も理りに折かれ呆れ果て、赤飯を他より貰ひながら、心みも得せざりしとかや。

○極樂の沙汰

一休の御寺へ日ごろ御出入申しける白俗なるもの、唯一向に彌陀の淨土に生れんことを願ふ心深かりし者ありしが、さる程に當時の名僧と聞けば、八宗九宗の隔てなく、足を空様に爲し、彼方此方へ参りつゝ、極樂淨土に生せんことの汰汰のみに、日を暮らしける成時一休和尚の御寺へ参りて申しけるは、某は淺ましく候て、愚痴暗昧の身と生れ候へども、持ち難き佛生を具し申す上は、如何様やうにも修行仕り、來世は必ず極樂國へ生れ申したく存じ申す、誓願深く候、さるに依て四方の能化たちへ参りては、承り候に、他の師は十

万八千里の遠きあなたに極樂ありと教へ給ふに、一休様には地獄極樂目の前にありと示し給ふ遠き道の程に候へば、百里や二百里の遠きも有まじきにも候はねども、斯様に大相違あるに依り、某迷ひ申候間あはれ此上の御慈悲に實を示し給へど、涙を流して口説きける、和尚聞しめし、されば、迷執深き者の爲には、十萬億土と説き、悟了通徹のものには目前と説き、御經にも去此不遠とあるは此處ありと曰へば、俗重ねて申しけるには、斯様に懇切に御示しを承り候へども、終に七寶莊嚴の極樂、いかほど尋ね申しても、見申したる事なく候ほごに、迎もの御慈悲に、今一句懇ろに御示しに預り度こそ候へといふ、一休聞しめし、さればこそ、極樂目前にありといふは、七寶莊嚴の形ちあるにはあらず、人の爲に口に説きて示す極樂

にあらず、人と自己に言句を離れて悟り得ずんば知ること無し、屢々座禪工夫して見付けよと仰せられければ辱しとて家に歸り襖を被り、晝夜案じ暮らし明かして、偶と違たゞしく和尚の寺へ参り、溜息をつぎ、さてく目前の極樂をこそ見つけ候へとて、さて多くの衆生の迷ひと知らざるこそ不憚の事に候へ、此度こそ悟りは開けて候とて、笑を舍み小踊して申しける、一休聞きて、然こそあらめ、心の面目だに開けなば、何の疑ひかあるべきぞ、さりながら其方の明らめようは如何と問ひ給へば、さればこそ此極樂と申すは、貧賤富貴にも依らず、老若男女の隔も無く朝夕きうりにある事に候と言ふ和尚打うなづき尤々よき心得かな、さて其極樂に朝夕安座したる心は如何と問ひ給へば、されば其事にて候、美食疏飯に限らず、朝

夕の食物しょくぶつを樂たのみに食たぶる所こそ極樂にて候よと、さも自慢じまんらしく申しければ、一休も手てを打うちて笑わらひ給たまひけるとかや。

○弟子でしの申まうし入れ

一休和尚いっしゅうおしょうの檀徒だんとに愚おろかなる者ものありける、此者折々せり参りて御物語おんものがたりを承りけるが、或時あるとき、一子出家いっししゅつがすれば九族きゅうぞく天てんに生うまると云ふ法話ほふわを承りて、深く信じ、只一人ただひとりの子こを持ちたるが、此小兒こしょうを御弟子おでしに成なし下され候へとて連つれ來りける、易やすき事なりとて、直すさま髪かみを剃そり落おし、小僧せうそうと爲し、頭かしらを御手おんてにて、さらりくと撫なで廻まし給へば、親おやは何ぞ有難ありがたき御引導おんいんどうもあるべきと、耳みみを澄すまして聞居きこたるに、和尚おしょう作り聲こゑして、さんにあれ、牛うしのさし、三べんまで日ひひければ、親おやは案あんに相違さうゐし、大きに腹はらを立て、是は曲まがも無い事ことを日ひふも

のかな、佛ほとけまでは得えならずとも、菩薩ぼさつにあれとありとも、定まめて有難ありがたき御引導おんいんどうも有るべきと、存ぞんじの外ほかなる牛うしの陰囊いんなんにあつて何の益えきか候ぞやとて、一休を頻しきりに睨にらみける、其とき和尚おしょう打笑うたわらひ給ひて、されば末法まっぽうの出家しゅつがは、行ゆひ難かたくして落おち易やすし、さる程ほどに牛うしの陰囊いんなんは、ぶら／＼として落おちさうに見ゆれども、一生いっせう落おちたる例れいし無し、然るに依よつて斯かくは日ひふなりと仰おほせければ、彼かの檀徒だんと何とか心付こころづけん、調しらべを承うければ、面白おもしろく有あがたく候とて、一子いっしを連つれて歸かへられける。

○天てんの笠かさ

關東くわんとより一休いっしゅう御上京おんじやうきやうの折せりから、然るべき大名だいめいと思しきものと、後あとになり先まになりて登のぼらせ給ふ、頃ころしも舊ふる六月むつきの末すへつかたなれば、暑氣しよき甚はしかりしかども笠かさをも召めさず歩あき給ふ、彼かの大名だいめい心優こころやさしき方かたにて